
月麗学園の大河くん

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月麗学園の大河くん

【Nコード】

N8084L

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

この月麗高校の全校生徒は能力者。主人公、高坂大河はその学園の生徒会、役職は副会長。とある日無能力者だった彼は能力者になった。これは大河くんの非日常的な日常学園物語

始まり（前書き）

読みきりじゃなくて連載にしてみました。

始まり

俺、高坂大河は、月麗学園高等部の一年生です。この月麗学園はすこし変わったところがあります。それは……。

「高橋ここで会ったが100年目、勝負だ!」

「懲りないな旭、返り討ちしてやる」

99.9%が超能力者だということだ。残りの0.1%は、俺なんだが……。そんな落ちこぼれの俺に話しかけてくれる人が居るそれは。

「ちゃんと大河も能力の練習しなきゃダメだよ」

「してるけどさ、中々能力が発動しないんだよな」

そう言ってくるのは、幼馴染の彩崎奈々だ。あっすういえば俺は、落ちこぼれているけどみんなに嫌われているわけではない。落ちこぼれの俺に優しくするなんてみんな優しいな。

「人によって発動条件が異なるからね」

「発動条件か……」

能力の発動には条件があるが大体の人は、この学園のカリキュラムを受けていれば能力は、発動するはずなのに俺は、何故か発動しないんだよな。

能力の代表例は、発火能力、召喚能力、治癒能力その他色々ある。それに能力数値があつてそれが高いほど能力が強い。高いのでは170とかだ。ちなみに奈々は、電気操作といつて電気を操る能力で数値は、100ぐらいだったと思う平均数値は100だから奈々は、平均のところだ。それには比べて俺は0か。

「落ち込まない落ち込まない」

べつに落ち込んでないよ、目からしよっぱい水なんてでてないよ。

「まずは、発動条件を見つけなきゃね」

優しい幼馴染を持って最高です。

「HRを始めるぞ席に着け」

HRが始まり先生の話がはじまる」

「ここ最近、自分の能力に酔いしれた生徒が弱い生徒を倒す。そんな事件が続いている。みんなも気をつけるように」

『『『ハイ』』』』

低能力者狩りか俺も狙われるのかな……。

「特に高坂」

「酷いですよ先生、気にしてるんですよ俺デリケートなんですから」

「文句があるなら能力を発動させてか言え」

能力ね……。

先生のHRが終わり次は、授業か、もちろん能力の勉強や実践の授業などがある、でも普通の授業だってある。みんな個人の能力があるが基本の能力だってあるそれは、スプーン曲げみたいな何かを曲げたり動かしたりするそれは、俺にだってできる。だからこつちの基本は、結構使い慣れた。いいなー自分の能力を持っている人は、次の授業は、能力の実技だ、ハアー。

「まあそんなに落ち込まない」

「落ち込まずにいられるか、お前はいいよな能力があって」

「それ何回も聞いたよ、それに私も条件探すからがんばろ」

「…ポツ」

「どうしたの大河顔赤くしちゃって」

「……何でもねえ」

かわいいすぎるじゃねえか。

無理だあんな奴に勝てるわけない。基本の能力しか使えない奴があんな水を操る奴に勝てるわけないだろう。おかげ体操着も濡れたし最悪だ。早く制服に着替えよう。

早く教室に戻る。そう思って俺は、教室まで走った。途中あるものを見てしまった。

『鬼ごっこは、終わりだよ。おとなしく捕まりなよ』

『いやだ！ 誰か助けて』

鬼ごっこ？ 遊びか？ まあいいや。教室に行かなきゃ。

全ての授業が終わった。

さっきの何だったんだろう？ 気になるけどいいか。

「大河一緒に帰ろう」

「あ…うん」

奈々と一緒に帰ることになった。鞆に教科書をつめて帰る準備をする。すると……。

「3-Aの桐風海斗です。彩崎奈々さんは、いらっしゃるでしょうか？」

「あつ大河ごめん、委員会の仕事があつたんだごめん。先に帰って」

「うん、分かったよ」

あの人は、委員会の先輩か、じゃあ先に帰ってるかな。

時間は7:00になり外が暗くなってきた。

ブルルルル……ガチャッ

「もしもし高坂ですけど」

『あつ大河君、ねえそこに奈々居る？』

奈々のお母さんが

「居ませんが」

『居ないの……心配ね』

「どうしたんですか？」

『それがね学校から帰ってないみたいなの、心配して電話したけど出てくれなくて』

委員会って行ってたが心配だ。

「警察には、連絡したんですか？」

『いえ、大河君の家に居ると思つてまだ連絡してないわ』

「じゃあ俺学校探してきます。おばさんは、警察に連絡してください」

『お婆さんじゃないでしょ、お姉さんでしょ』

「すみません、とりあえず連絡してください、お願いします」

『大河君も気をつけてね』

「はい！」

という事で学校に来たが、校門に鍵がついている。職員は、居ないだろうしどうしよう。壊すか？ それは、ダメだろう。能力者がいるんだそこらへんの強度ほこっているだろう。本当に鍵しまっているのかな確かめてみるか。

……開いた。鍵を開けとくつてこの学校どうなつてんだ。結果オライか、まあラッキーって思つておくか。

まずは、自分の教室に向かうか。

ボタンッ！

「おい、奈々いるか」

そこには、誰も居なかった。ただ奈々の机の上には、奈々の鞆が置いてあるだけだった。

「奈々……」

鞆が置いてあるっていうことは、まだ学校に居る確立は、あるってことだ。急がなきゃ。

『……助けて…誰か』

『助けなんて呼んでも誰もこないよ』

『……先輩が低能力者狩りの犯人だったんですね』

『低能力者狩り？ 全校には、そう言つて伝えられてるんだな。違うな俺は、女子しか狙わない、美少女限定な』

『……最低ですね。女性を狙うなんて』

『最低とでもなんとも呼ぶが良い』
『本当に最低ですね、大河とは、大違いの』
『なんともいえ、まあ能力の持たない王子様は、助けに来ても意味がないがな』
『大河を馬鹿にしないでください！』
『うるさいっ』

どこだよ奈々、上の教室から片っ端から行くか。それとも下から。どっちだよ。

『大河を……にしないで……』

「奈々！」

体育館か！

『……大河を馬鹿にしないでください』

『まだそんな口がきけるのか』

『……訂正してください』

『アイツは、馬鹿じゃないカス以下だ』

『大河は、カス以下じゃない！ そんな先輩こそカス以下だ！』

『なにを言う。黙れクソアマが』

助けて大河……。

「……どけるよ先輩、聞こえねーようだな、じゃあもう一回言ってる、奈々に近づくんじゃねえ！」

……大河。

ここから奈々の声が聞こえたような気がするんだが、慎重に行かなきゃな。

『……大河を馬鹿にしないでください』

『まだそんな口がきけるのか』

『……訂正してください』

『アイツは、馬鹿じゃないカス以下だ』

『大河は、カス以下じゃない！ そんな先輩こそカス以下だ！』
『なにを言う。黙れクソアマが』

あれって委員会の先輩じゃないか。あっあの野郎奈々に手をあげ
やった、ダメだもう我慢ができない。

「……どけるよ先輩、聞こえねーのかじゃあもう一回言ってやる」
ここで一息入れて言う。

「奈々に近づくな！」

「ツチ、気づかれたか。でも能力を持たないお前にどうにかできる
というのか？」

「能力がないからどうした、逃げていい理由には、ならないだろう」

「先輩への言葉遣いも知らないのか、じゃあここでお前を調教して
やるよ」

「それがどうした、脅しのつもりか。俺には、そんなのは効かない
がな」

「痛いめを見ないと分からないようだな」

一応能力が分からないから、間合いをとる。

「間合いをとろうが能力がないお前には、防ぐすべがないだろうが
な」

確かに基本の能力だけで倒せる敵じゃない。

「ついでに言うと俺の能力数値は、150だ！」

やばいじゃん、能力数値150っていえばかなりのレアだ。最悪
だこんな相手に俺は、喧嘩をうったのか、でも奈々に手をあげたん
だ、そんなやつゆるせない。

「そうかレアだな、でも俺もレアだぜ。まあ数値は、0だがな」

「よかつたな、自慢か？」

能力が分からないしどうしよっかな。

「動かないなら俺からやるぞ」

来る！

「喰らえくサイクロンカッター」

風か……。

イタツ。風を刃のようにして撃つか、強いな。俺は、チヨークが針を動かして投げることしかできないし。

「もう駄目なのか、つまらないな。もうちょっとつきあえよ！」

「だれがもう駄目だって言った」

「威勢だけは、いいんだな」

「どうも」

「褒めてないがな、もう一回喰らえ」

またか、目に見えないから防ぎようがない。ここは、一応なにかをた盾にするか。あつマツトがあつたそれを盾にするか。

「マツトを盾にか、考えたが意味がないな。数値が1000ぐらいの奴ならガードできるが、俺は、150だぜなめてんのか」

たしかにそれは、思っていた。

「グハツ！」

「効いたか、どうだ痛いかな、後悔しているか。かつこつけてこんなところ来なきゃ良かったって後悔しているだろう」

後悔かしてるかもな……。能力も使えずに一人で来て……。かつこつけてやられて……。格好悪いじゃないか……。でも負けるわけには、いかないんだ。守らなきゃいけないんだ。許さないんだ、奈々を傷つけたアイツだけは。

「後悔しているかもな、でもお前は、許さない！」

「じゃあ永遠に後悔してろく神風」

終わったか、俺の人生。短かったな。能力さえあれば勝つことができたのに。悔しい自分の不甲斐なさに。でも奈々を守れたんだからいいか。

「なに負けましたって顔してるの大河まだ終わってないよ」

なんでそんなところに居るんだよ。でもそのとおりだ。俺は、まだ負けてない。俺は、決めたんだ。奈々を守るって。

「負けてたまるか！」

そのとき大河の体が光に包まれた。

「もしかしてこれが俺の能力……。光の制御か」

「へーそれがきみの能力か、でもいきなり能力を使いこなすのは、無理だと思うよ」

「それがどうした、ただ使いこなすだけだろ」

「ふーん、使いこなせる気満々だね」

「こつやるのか、イメージを実現させる……。できた<光の剣>か、<エクスカリバー>でもいいな」

「一瞬で使いこなしただと」

「この能力は、誰かを傷つけるための能力じゃない、誰かを守るための能力だ。お前は、低能力者狩りの犯人だろ、お前は、いろんな人を傷つけた。そして奈々を傷つけた。そんなお前を俺は許さない」

「許さなくて結構、お前は、ここで死ぬんだからな」

「自分の間違いだろ」

「おつお前！ <飛龍一閃>」

「<粒子砲>」

粒子砲もできちゃった、すごいなこの能力。

「これぐらいでいきがるな」

「凄い動揺してやがる。」

「<飛龍一閃三連>」

「<メガ粒子砲>」

メガまでいったよ。

「くそ何故だ、なんで今能力を手に入れたお前に負けてるんだ」

「能力より気持ちの問題だろ」

「気持ち……」

「それが分からないようなら駄目だな」

「うるさいこれで最後にしてやる、<神の息吹き>」

「<メガ粒子砲>……。結構体力使う……。でもこれで最後だ」

自分の体に光を集中させる、結構自分に負担がかかるな、でもこれで最後にしてやる。

「喰らえく流星>……なんてありきたりか？」

光のスピードで先輩の背後に回り思いつきり背中を殴った。

あ、ヤバイ勢いつけすぎて飛ばしすぎた。しかも体育館の壁突き抜けちゃった。怒られるかな。

「……すごい、かつこいいよ大河」

「奈々無事でよかった」

本当に良かった

「……先輩に何かやられそうになった時は、怖かった。本当に助けてありがと」

「どういたしまして」

「また他の人にやられそうになったら光みたいに早く助けに来てね、王子様」

「王子様って……」

「鈍感王子でもいいかもね」

「俺は、鈍感じゃねえだろ」

「まあいいじゃん。……私だけの王子様」

「なんか言った？」

「いや、なんも」

「ふーんならいいけど。怪我は、ないのか？」

「心配性だね大河は」

「お前が気にしないだけだ」

「……私は、鈍感な大河が心配だよ」

こうして奈々は、無事に家に帰ることができた。次の日、あの先輩は、学園長に呼び出され2週間の停学になった。

「ねえ大河」

「なんだ」

「もしかして、能力の発動条件ってさ、大河の誰かを守りたいって
いう強い意志じゃなかったのかな」

「そうかもしれないな」

誰かを守りたいっていう強い意志ね。誰かが傷つくのは、いやだ。でもみんな守れる訳じゃないし、だから俺は、こいつを守っていきたい。

「おい、お前ら席に着けHR始めるぞ、それにうれしいお知らせだ。なんと高坂大河が能力を発動させやがった」

『『『『『おおー』』』』』』』

「だから実技のとき、手加減しないように」

『『『『『ハイ』』』』』』

「先生能力は、発動できませんが。まだ使いこなせていません」

「でも彩崎の報告によると十分使いこなしていると報告されているんだが」

「奈々！」

「てへっ」

「てへっ……じゃねーよ」

「ごめんね大河、でもいいじゃん本当のことなんだから」

「みんな本気で倒しにくるよ」

「そのときは、私を助けたときみたいに、たたかってね」

その笑顔は、反則だと思います。

そんな感じで高坂大河の日常が始まりました。

始まり（後書き）

これからも応援よろしくお願いします。

友達と戦い

あれから能力が発動して実戦練習でよく勝負を申し込まれる。

「大河お前に勝負を申し込む」

「またか、ハア」

「喰らえく火炎弾」

「……く光の弓」

何回もこれみたいなくり返しばかりだ。

「大河も大変だねえ」

本当にだよ。

「大河大変そうだが俺と勝負しないか、奈々ちゃんをかけて」

いきなりこんなバカを言っているのは、俺の友達ふじさきかいの藤崎海だ。っ

てなんで奈々を賭けるんだろう？

「まあいいが……」

「真剣勝負な」

「いいぜ」

ってことで勝負になったけど……。はつきり言っただ嫌だな……。めんどくさいし。しかもこいつバカなくせに能力数値が150以上だった気がする。

「俺からいくぜ」

先制攻撃か、でも能力数値は、分かるけど肝心の能力が分からない……。

「喰らうがいいく水銃」

「あぶなっ」

でもこれで分かった。能力は、水か。しかもあの水銃って能力結構速い。

「危ないな、反撃だく光の剣」

「接近戦か、だったらこっちもく水の剣」

それにしても強いな。こっちもちよつと本気ださなきゃな。

「<聖人の剣>」

「さっきの剣と一緒にじゃないのか？」

「形は一緒かもしれないが、さっきよりも強いぜ」

「そうか」

「喰らえ」

一瞬だけ自分に光を集中させて、海の後ろにまわるが……。

「そうくると思ったく水分身>」

読んでいたか……。ならもつと強い技をだすまで。流星は、結構きついしな。違う技か。

「<光の弓>」

「次は、遠距離攻撃か？ ならこっちは、<水龍>」

次は、龍か……。こっちは、光だから避けられないくはないが、当たったらヤバイだろう。流星150以上。

「怖くて手も出ないか？」

「……後悔しろよ<流星>」

「ったく手加減しろよな」

「お前に手加減はできないよ」

「ひどいなお前」

「こっちは、ついこのあいだ能力が発動したんだぞ」

「そうだけどさ。お前能力数値測ったか？」

「能力数値か……。測ってないな」

「お前たぶん150超えてんじゃねえーの」

「そーか」

「そうだよ！ 俺を倒したんだからあるだろう」

明日でも測ってもらうか。でも何か忘れてしているような気がする、何だろう？

「大河勝ったの？ じゃあ私とつ……ってどこに行ったの？」

友達と戦い（後書き）

読みづらくてすみません。

能力数値

ってことで能力数値を測ることになった。能力数値の測り方は、簡単だ。カカシみたいな人形に自分の能力をぶつけるといって測り方で、治癒とか交信・受信とかサポート系の能力は、機械を使って測るそう。俺だけ測ると思ったら『どうせならみんなやるか』ってことになった。ついでに俺は、最後に測る。

「まず初め高橋」

「はいっ」

始まったな。

「110、はい次、山田」

「はい」

「100、次、彩崎」

あ、次は、奈々か。

「私頑張りますよ！ いつも練習してたんだから。大河に負けるわけにはいかなし、<雷槍>」

雷の槍か……。それにしても強そう。150ぐらいはあるんじゃないのかな。

「おお凄いな155だ、よくそこまで上げられたな」

「えへへ、だから頑張ったって言ったじゃん。……本当は、大河を守るために頑張ったんだけどな」

「なんか言った？」

「ううん、何も言っていないよ」

「そうか」

「そうだよ。あ、次、海くんだよ」

「ふくん」

「俺も大河にこれ以上負けたくねえし！ <水龍>」

あの技か。動かない相手だから当てやすいし結構上位なのかな。

「藤崎、160だ」

「よし奈々ちゃんに勝った」

「えー、手加減してよ海くん」

「奈々ちゃんにそう言われようが手加減はできないな」

「ケチ」

そんな会話を奈々と海が繰り返していると俺の出番になった。

「じゃあ行ってくる」

「頑張つてね大河」

「おう」

「まあ頑張れよな大河」

「……………」

「返事ぐらいしろよな！」

海は、ほっといて、とっと終わらせるか。

「みんな主役がやるぞ注目だぞ」

ザワザワ

『どんな技を出すんだ』

『たしかに注目だな』

『どうせたいした事ないだろう』

『でも授業で戦ったけど強いぞ』

海のやつあとでしばく。

「<聖人の剣> & <粒子斬>」

聖人の剣に粒子をまとわせて、それを放つ。そんな技だ。

「大河……………180」

『『マジかよ』』』

こつちがだよ！

「本当ですか先生」

「本当だ」

「やったじゃん大河」

「……………」

言葉がでない。

「どうしたの大河」

「いや、信じられなくてな」

「くそつ、負けた……」

「これで能力数値の検査を終わる、解散！」

ザワザワ

『大河くん凄かったね』

『かつこいいだけじゃなくて能力も強いし凄いな』

『でも私は、能力のない大河くんを守りたかったな』

『私もそう思う』

『だよー』

『でも私は、守ってほしいな』

女子が変なことを言ってる気がする。

『高坂大河……面白そうですねえ』

能力数値（後書き）

感想などよろしく願います。

生徒会

今俺は、なぜか生徒会室に居る。俺だけではない奈々も居る。そして俺の目の前に女の人が居る。その人は、すごく美しい美人さんだ、かわいいじゃなくて美しいという言葉がすごく似合う。その女の人は、黒い長い髪をなびかせこう言った……。

「高坂大河くん、彩崎奈々さん、是非生徒会に入ってください」
はい？

事の始まりは、一本の放送から始まった。

『1 - Aの高坂大河くん、1 - Aの彩崎奈々さん至急生徒会に来てください繰り返します……』

なんだ俺と奈々に用か？ この前の事件は、終わったし。何だろ
う。

「大河至急って言うてたし急ごうか」

「ああ」

コンコンツ。

『はい、お入りください』

「失礼します」

「高坂くんと彩崎さんですね」

「はい」

「いきなりなんですけどお願いしてもいいですか」

そう言っただけは、ひとつ間をとって言った。

「高坂大河くん、彩崎奈々さん、是非生徒会に入ってください」

え？ 何言っただけのこの人。

「え、何ですか……？」

ちよつと理解ができない。

「それは、あなたの方が適任だと判断したからですよ」

「それなら奈々より海のほうが適任だったと思います」

「それは、海っていう人の性格が苦手だからですよ」

「そうかあいつの性格か……。それよりなんで海の性格が分かるんだ。」

「なんで海の性格が分かるんですか？」

「そんなの簡単ですよ。私が生徒会長でこの月麗学園の生徒の性格など調べようと思えば、すぐに分かりますよ」

生徒会会長か……。

「また質問してもいいですか？」

「はい、どうぞ」

「なんで生徒会長がいるのに他の生徒会役員がいないんですか？」

「この学園の役員の決め方は、まず生徒会長を決め、他の役員の方は、生徒会長が指名する……。っていう仕組みです。ちゃんと朝会で話聞いていましたか？」

「いえ、全然。まず俺……。僕は、能力がないから関係ないかな。って」

「あ、べつに敬語じゃなくてもいいですよ」

「はい。それで俺たちが選ばれたと」

「そうですね、他にも二人いますが」

「そういえば奈々が喋ってないな、どうしたんだろ？」

「そつと奈々の方を見てみると奈々が震えてる。」

「どうしたんだ奈々？」

「どうしたんだ……。じゃなくて生徒会役員ってそれだけで凄いことだよ！」

「そんなに凄いのか？」

「そうだよ！ 生徒たちの頂点だよ、毎年能力数値が高い人が選ばれるんだよ」

「へー、そうなんだ」

「ってことで生徒会に入ってください」

「どうしようか、入って悪いことは、無いみたいだけど。奈々は、入る気満々だし。どうしようか。」

「私は、入ります。っていうか入らせてください!」

「奈々さんは、決まったみたいですが大河くんは、迷っている顔をしていますね。無理に入らなくてもいいですよ」

奈々は、やっぱり入るか。

「自慢話では、ないですが私のファンクラブがあります。その人たちに、断ったってということがばればあなたは、狙われる事になりますよ」

これって脅迫ですか？ ほぼ無理やりだと思っただけ。

「どうしますか大河くん」

「入りなよ大河」

「あ、1つ言い忘れていました。生徒会に入ったら風紀委員の仕事をしてもらいます。この学園は、風紀委員ないです。だからかわりに生徒会がやるんです。この学園全員能力者ですから、能力を使った暴力がありますし、だから能力数値が高いこの生徒会が風紀委員の仕事もやっているわけです」

風紀委員か、面倒だな。

「その他にも生徒会の権限で授業がさぼれます」
「なんだって授業がさぼれるなんて。」

「それに生徒会の権限であのいつも行列の学食にしなければ買えません。」

マジですか！

「生徒会の権限でいろいろできます。入る気になりましたか？」

「もちろんですとも!」

「こんなおいしい話断るわけがない。」

「まあ入らなかつたとしても生徒会の権限で強制的に入れますけどね」

「結局僕は、入る予定だったんですか……」

「はい、そうですね。では、詳細など細かい事は、後日ということ」

「分かりました」

「では、さようなら」

「失礼しました」

「あー、私緊張したよ」

「俺もだよ、いきなり生徒会室に呼ばれて生徒会役員になってだろ、ビックリしたよ」

「そうだね、あとそれに私達以外にあと2人って誰だろうね」

「さーね」

「あらめてよろしくね大河」

「こちらこそ」

生徒会（後書き）

どうでしょうか？ もうすぐでテストなので投稿が遅れますが許してください。

そして僕に感想をください。

生徒会 その2 (前書き)

テストも終わり完全復活です

生徒会 その2

次の日、俺と奈々は、生徒会室に来た。

「それにしれも緊張するな」

「そうだね」

「しかたない入るか」

「失礼します」

そう言っ入ると会長さんが居た。……名前聞くの忘れてた。それにソファアに2人座っていた。

「こちらは、2年生の六条晴樹くん、それでこちらも2年生の雛森由香里さんです」

「よ、よろしくです」

なんかおどおどしているな。

「よろしくね。私のことは、由香里って呼び捨てにしていよいよ」

「よろしく願います。僕は、高坂大河です」

「私は、彩崎奈々です。よろしく願います」

「これでみんな揃いましたね。では簡単な自己紹介をしましょう。名前、クラス、趣味、能力を言ってください。私からやりますよ」

自己紹介か……。普通のことでもいいかな。

「私の名前は、水無月葵です」

葵さんか、初めて聞いた。たぶんここにいるみんなは、知っているかな。

「クラスは、2 - Bです。趣味は、読書。能力名は、空間制御です。自慢じゃありませんが能力数値は、2000ほです」

2000ってありえないだろう。150でもレアなのに。

「では次2年生願います」

「私先やるね。さつきも説明したけど名前は、雛森由香里。クラスは、2 - Aです。趣味は、可愛い物を集めることです」

「由香里先輩！ 私も可愛い物集めるの好きです。もしよかったら

私と一緒に買い物に行きませんか？」

「いいよ、近いうちに行こうか。もちろん……」

「男子が荷物持ちとして！」

「え、え！」

それは、ないでしょう！

「ふふふ、楽しそうですね。私も一緒に行ってもいいですか？」

「もちろんです」

『あのう先輩』

『え、何？』

『俺たち承諾してないのにいつの間にか荷物持ちになっていませんか』

『そ、そうみたいだね』

「その男子、なにコソコソしてんの」

「い、いえ何も」

「いきなり意気があってるね」

「本当にですね」

先輩と奈々おかげで晴樹先輩と意気があった。

「その話は、ちょっとおいといて。能力は、発火能力。2年生の中では、紅蓮の姫様で有名かな」

「紅蓮の姫様？」

「そう。能力数値がでかい私に喧嘩を売ってきた男子どもを私の紅蓮の炎で燃やす。それで紅蓮の姫様ってわけ。私を怒らせなければいい話だし。よろしくね」

この人を怒らすと俺が黒焦げになるよな。気をつけよう。

「僕は、六条晴樹です。クラスは、2-Cです。趣味は、人間観察。能力は、氷結です」

氷結ってことは、氷を操るのか。なんかこの先輩とは、仲良くなれると思う。

「先輩よろしくお願いします！」

「あ、よろしく。えーと大河くん」

「はい、そうです」

そんなこと言っていると奈々の自己紹介になった。

「1 - Aの彩崎奈々です。趣味は、由香里先輩と一緒に可愛い物を集めることです。能力名は、電気操作です。これから1年よろしく願います」

奈々が終わり、俺の番となった。

「高坂大河です。クラスは、奈々と一緒に1 - Aです。趣味は、ゲームです。能力は、光制御です」

これでみんなの自己紹介が終わった。

「それでは、自己紹介も終わったことですし役職を決めましょう……
って言っても私の方でもう決めましたが」

役職かちよつとめんどくさいな。

「では、雛森さんは、会計をお願いします」

「分かりました」

「奈々さんも雛森さんと一緒に会計をお願いします」

「はい！」

「奈々ちゃんよろしくね」

「よろしく願います！」

この2人なら仲良くやると思う。

「六条くんは、書記を頼みます」

会計・書記残ってるのって……。

「大河くんは、副会長として私をサポートしてください」

「な、何ですか。僕より2年生の先輩の方が適任だと思いますけど……
って言ってみただけ……。」

「六条くんは副会長が適任ですか？」

これは、俺も思っていた。

「雛森さんは、好き勝手やりそうですし……」
それも思った。

「ですから大河くんが適任かと」

「会長さん私は？ 私は？」

奈々スルーして話を進める。

「でも俺なんか副会長なんか……」

「自分に自信が持てませんか……でも私は、諦めませんよ。どんな卑怯な手を使つてもあなたを副会長にします」

「会長さん私を副会長に……」

たぶんここで断つたら会長さんのファンの人達に襲撃されるかもしれない。

「会長俺副会長やらせてもらいます」

これがいい判断だと思う。

「では、意見がある人は、いませんか？」

「会長さーんわた……」

「意見は、ありませんね。次の朝会に生徒会役員の発表をするので自己紹介を考えてきてください。内容は、クラス・名前・役職・何をがんばるか、最後のはなんでもいいですよ」

「……分かりました」「……」

「もうそろそろで下校時間なのでこれだ今日の生徒会を終わります」

「し、失礼しました」

最初に六条先輩が生徒会室をでた。

「さようならー」

次に雛森先輩が出て行った。

「じゃあ俺も失礼しました」

「私もお疲れ様です」

「お疲れさまです」

そう言つて俺達は、生徒会室を出た。

「なんか面白いメンバーだな。なんか退屈しなさなそうでよかった」

「そうだね退屈しないね」

こうして生徒会役員になりました。

生徒会 その2（後書き）

誤字脱字報告や感想などよろしくお願いします！

朝会とお泊り

朝会するとき生徒会役員を発表した。そして普通の自己紹介をした。みんなは、驚いたり怒ったり悔しがっていた。

「俺も生徒会に入りたかった……」

「大河くんが生徒会に……。クラスが一緒だったのに告白もできなかったし。生徒会に入ったら大河くんに告白するチャンスがなくなっちゃう」

「六条はともかく、大河は許さない。両手に花じゃないか」

「夜道を襲うか」

「いいなそれ」

「賛成だ」

「『大河を殺す!!』」

なんか変に結束してる!

「それは私が許しません。私が大河くんを守ります!」

「会長……」

「つてことで今日私の家に泊まりませんか?」

「お断りさせていただきます!」

「あら。遠慮しなくてもいいんですよ」

「いやです!」

「大河くんが好きなピーをやったりズキーンみたいなことをしてもいいですよ」

「会長! 俺そんな変な趣味ありません!」

「そうだったんですか……。残念です……」

「残念じゃないですよ!」

「大河にそんな趣味があつたなんて……。でも私そんな大河でもいいから私と……」

「『ダメ』」

ビックリしたー。いきなりどうしたんだ女子たちは。それより奈

々も勘違いしてるみたいだ。

『私もいろいろしましたが朝会で告白は、ダメですよ』

『私も今になって緊張しています』

会長と奈々が何か話してる。

「それよりも朝会を終わらせましょう会長」

「ああそうですね。ではこれで朝会を終了します」

ザワザワ

「よし終わりましたね。最後変な感じになってたけど……」

「ま〜いいじゃん終わったんだし大河くん！」

「そうですね終わったんですし」

「分かった大河」

「分かりました！」

「それで今日家に泊まりにきませんか？」

「またそれですかお断りさせていただきます」

「ダメですか……。じゃあ皆さんが泊まりにきたらいいですか？」

「いいですけど……。六条先輩も来るんですよね」

「ぼ、ぼく？ いや、やめてお……」

「六条くんは来ますよね？」

「え？」

「来ますよね？」

「え、あ、僕……」

「来ますよね！」

「……はい」

途中から来なさいって聞こえたよ……

「良かったです残りの2人も良いですよね？」

「「はい」」

「皆さん来ますがもちろん来ますよね？」

「……はい」

渋々承諾した。それにしても泊まり……。女子の家……。夜道を襲われるより危険じゃないか！ 思春期男子を女子の家に……危な

いじゃないか！

「会長ちよつと考え直してくれませんか……。そんなにみんなとお泊り会みたいなのをしたければ俺以外の皆を誘えばいいじゃないですか」

「……大河くん鈍感ですね」

「何か言いました？」

「い、いえ」

「……僕は、行くことになってるの？」

先輩ごめんなさい。

「その話は、放課後にしましょう。では解散！」

「……はい」

放課後俺たちは、生徒会室に行った。

「それで大河くん家に来てください」

「いやです。っていうかいつまでこの会話を繰り返すんですか？」

「大河くんが承諾するまでです！」

「なら生贄……じゃなくて俺の代わりに六条先輩を誘えば良いじゃないですか」

「……生贄って」

「六条くんも来るって言ってるんですから大人しく来てください……。でなきゃ力づくで連れて行きますよ」

「俺は、行きません！」

「ならしょうがないですね……。奈々さんお願いします」

「はい。〈電気シヨック〉」

「つく！」

バタンツ。

『これで気絶しましたね』

『ちゃんと力づくでやるって前置きしたから悪いのは大河ですよ』

『それにしてもやりすぎた？』

『大河にはあれぐらいが丁度いいんです』

『じゃああと大河くんを運ぶだけです……』

『ぼ、僕？』

『いや、流石に六条くんは、無理そうなので私の能力を使います』
『会長さんの能力って空間制御？』

『はい、そうですよ皆さん鞆持つてください』

『なにをやるんですか？』

『まあ見ててください<空間移動>』

『うわっ。何が起きたんですか？』

『空間移動……テレポートみたいなものですよ』

『すごいですね会長さん』

『で、ここが葵さんの家？』

『はいそうですけど』

『広すぎですよ。会長さんってお嬢様！』

『あ、そういうえは泊まるための荷物持ってきてませんよ』

『大丈夫です。こっちで用意しますので』

『ありがとうございます』

『それにしても大河くん起きませんね』

『このままもう一生起きなくなったりして……』

『不吉なこと言わないでくださいよ先輩』

『ぼ、僕もちよっと心配だな……』

『大河がもうちよっと敏感だったらいいだけの話です』

『まあね、あらは物凄い鈍感ね』

『本当に私……』

『い、いたたた。奈々電気ショック強すぎだよ』

『っ！』

『なにビククリしてんの』

『大河がいきなり起きたから』

『あ、ごめん。それにしてもここが会長の家か……。広いな』

『そっだね。物凄いお嬢様だね』

『結局泊まるのか……』

「もう遅いわよ。逃げられないよ」

「ハイハイ」

あともう少しで言ってしまうそうだった……危ない危ない。

「会長よろしくお願いします」

「あら、抵抗とかしないんですね」

「俺だって学習能力は、ありますよ」

ということできなり会長の家にお泊りになりました。

朝会とお泊り（後書き）

感想などよろしくです。

能力バトル(前書き)

最近時間がなくて書けませんでした。

能力バトル

ってことでお泊りになりました。

「では大河くんたち男子はこちらの部屋を使ってください」

そう言っで連れてこられた場所はかなり広かった……。

「ご自由に使ってください。夕飯の時間になったら呼びますので。」

夕飯までここで待つのか……。すごいなこの部屋……。このベッドもふかふかだー。

「大河くんちよつといいかな？」

「なんですか先輩？」

「いや、ちよつと気になってたんだけど……。会長って大河くんに気があるのかな？」

会長さんが……。絶対ないな。

「会長さんはモテモテなんですから、俺みたいな普通の男なんて興味ないですよ」

「そうかな」

「はいそうですよ」

ボタンッ！

「大河あそぼー」

「わっ、ビックリした。入るならノックしろよ」

「ごめんごめん」

「とりあえず男子共遊ぶわよ」

「でも、何をして？」

「もちろん……」

「もちろん？」

「能力のバトル！」

「遊びじゃありません！」

「えーでもみんながどれくらい強いかわかっていいじゃん」

「危ないじゃん！」

「賛成の人！」
そうすると俺以外の人が手を上げた。
「六条先輩なんで手上げたんですか！」
「大河くん……男は非力なんです……」
「たぶんあの女子に脅されたんだろう……。同情します。」
「多数決で決まったことなんだから大河大人しく戦いなさい」
「はい」

……と、ここは会長さんの家にある稽古場です。能力に耐えられるように壁とか強化してるらしいです。
「さーて誰やる？ やっぱ私と晴樹がやる？」
「や、やめとくよ。黒焦げにされそうだから……」
「つれないな。じゃあ大河くんやる」
「俺も遠慮させてもらいます」
「よし私と大河くんがやることになったから」
「先輩人の言葉聞いてましたか？」

ってことで由香里先輩と戦うことになった……。ほんとに黒焦げにされなきゃいいけど……。
「じゃあ、行くよ！ <火炎弾>！」
その名のとおり火炎のだ。でも遅かったギリギリ避けられたけどかなり熱かった。

「あら？ 避けられちゃった」
「避けますよ！ あたったら黒焦げですよ！」
「そう？ 手加減したんだけどね」
手加減してあれって強すぎだ。
「そっちがこないならまた行くよ！ <火炎龍>！」
龍！ ものすごい強そうだよ！
「普通に避けれません！」
「あら？ そう？」

「……<光速制御>」

この技は光の速さを操って自分が光速で動く技。流星の改良版でそんなに体に負担はかからない。そして先輩の背後に回る！

「やっぱり避けたね。そして私の背後に回る……か、考えたね。でも予想はできてたよ。<火炎の盾>」

気づかれてたか……。

「本気でかかってきなさい！」

「じゃあ本気でいきます<光の弓矢>」

「やっと本気になったけどそれじゃあ私に勝てないよ」

「そんなの知ってます。次は<天使の聖弓>」

さっきの弓の改良版で攻撃力と速さが上がった弓……先輩は避けられますかね。

「さっきのを改良したのか……真正面から受けてあげる<火炎槍>」

そう言って先輩は持っている槍で矢が壊された。先輩が壊すからダメだから接近戦……でもそつちも危ない。どうすればいいんだ。

「動揺しちゃダメだよ……これは殺し合いじゃないし肩の力抜いて気楽に戦えばいいんだよ」

「ありがとうございます。じゃあ行きます<光の双銃>」

避けられないほど撃ちこむ！ さっきみたいに能力で防御されたらもつと強いのを撃ちこむ！

「喰らってください」

ズガンッ！ つと何回も銃声が鳴った。

「……<紅蓮の魔人>」

先輩がそう言うのと火の魔人がでてきた。マジかよ。

「そこまです！ これ以上は危ないと思いましたがので止めました」セーフです。たぶんあのままやってたら俺が黒焦げになってたと

思う。流石紅蓮の姫様……。

「では次、六条くんと奈々ちゃんお願いします」

ってことで次はこの2人です。

能力バトル その2 (前書き)

夏休み突入！ 今日からがんばっていっぱい更新していきたいと思
ってるので、よろしくおねがいします。

能力バトル その2

「よろしくおねがいします先輩」

「よ、よろしく」

奈々の戦いは何回か見たことがあるので六条先輩がどう戦つか楽しみだな。

「じゃあ行きますね先輩！ <雷の槍>」

そういつと奈々が槍で先輩に突っ込んだ。

「……<氷の壁>」

「……ッ」

奈々が氷の壁にぶつかったと思ったら次は……。

「<超電〇砲>」

ダメだああああー！

「<氷の壁>」

この技も防ぐのか……。

「<氷柱>」

「え？」

その名のとおり氷の柱が奈々を囲んだ。

「<氷のとげ>」

「<放電>！」

奈々はぎりぎりのところで氷のとげを壊した。

「<落雷>！」

「あ、危ないどうしよう、えーと<氷の壁>x5!」

先輩はぎりぎりでガードした。それにしても互角か？

「大河くんいま互角って思ってるでしょ」

「え、あ、はい」

「違うよ春樹はまだ本気を出していないよ」

本気をだしてないだって……。これからやばくなるなるのか。

「…………え？」

奈々が疑問に思ってる。しかも動かないし…………もしかして、
やっぱりそうだ。奈々の足が凍らされてる。

「<氷のとげ>」

また奈々のところに飛んでいった。

「<雷のシールド>」

「彩崎さんごめんね。もう終わらせるから」

「…………え？」

先輩がそういうと氷が奈々の足や手を凍らせて奈々は身動きがとれなくなった。

「会長さんこれでいいですか？」

「もちろんです」

つてことで戦いが終わった。

「奈々さんは誰と戦うんですか？」

「え？ 私も戦うんですか？ 私が戦ったらみんなすぐに倒れますけどいいですか？」

「…………遠慮しておきます」

「あら、そうですね。そういえばお腹すきましたね。夕ご飯にしましょうか」

「…………はい」

会長さんの家の夕ご飯はかなり豪華だった。俺みたいな庶民は一生食べなさそうなものがいっぱいあった。夕食後は風呂に入って、その後はみんなでゲームやランプをした。みんなでワイワイしていて楽しかった。今日ここにきて良かったって思った。ずっとこのまま時間が止まってしまえばいいなって思った。まあ遊んだ後寝た。朝起きるともちろんとなりで六条先輩が寝ていた。そうすると…………

「起きて朝だよ。土曜日だよ。みんなで出かけるよ！」

つと奈々が来た。

「そうよいつまで寝てんじゃないわよ。早く十準備して、荷物係さん」

あ、今日は土曜か……。そういえば俺たち荷物係だったけ……。
ってことで買い物に付き合うことになりました。

天麗市（前書き）

話がめっちゃくちゃになってきた……

天麗市

っということで女子の買い物に付き合うことになりました。……

これってデート？ いや、違うよ

「そういえばどこに行くの？」

「もちろん服買いに」

「その他にもいろいろ行くけどね」

たぶんいろいろ持たされるんだろうな……。

ちようどいいしこの町の説明でもしようかな。

ここは天麗市っていうところで大きく分けて3つに別れている。

1つはここ月麗、あとは星麗と陽麗に別れている。ついでに星麗学園と陽麗学園も能力者が100%だ。この3つの学園は小中高の1貫校のマンモス校だ。星麗学園は優しい人が多くてイジメもない学園。陽麗学園は昔は明るい子が多くてにぎやかだったけど最近は喧嘩とかが多く不良とかが多いらしい。ここ月麗はみんな仲良しで明るい学園だと思ってる。

「いきなり黙ってどうしたの大河？」

「いや、なんでもない」

とりあえずここ天麗市の子供たちのほとんどは能力を使うことができる。

「大河行こうよ」

「ああ分かってる」

「それにしてもこんなに買うなよな」

この女子は俺たち男子のことを考えずになんでも買って俺たちに持たせる……悪魔だ。

「服は買ったし次どこ行く？」

「休憩でいいじゃないか？」

正直疲れてきた……。俺の能力は肉体強化の能力じゃないからな。それだつたらまだ楽だろうけど。俺より六条先輩の方が心配なんだけどな。

「情けないわね、男子たるものこんなくらいで弱音はいちやダメよ」

「会長さんもこの女子たちに言つてください」

「えーと、そんなにこき使つたらダメですよ」

「ほら、分かつたか」

「はいはい、じゃあ休憩にしましょ」

「ご褒美として飲み物おごるよ何がいい」

「俺はコーラでお願いします」

「僕はお茶で」

「了解」

と言うと先輩は飲み物を買いに行った。

「それにしても服いっぱい買ったな……」

「うん、だつてかわいいものがいっぱいあつたんだもん」

「あの、話の途中で悪いですが」

「どうかしたんですか会長」

「いや、こちらへんにいっぱい陽麗学園の生徒がいっぱいいるのでなにか起こるのかなと思つただけです」

「そつえばいますね」

こちらへんには月麗の人しかいないのになぜか陽麗の人たちがいっぱいいた。

「喧嘩でもやるじゃないですか？」

「ここ月麗に喧嘩を売られそうな人物はいないですけどね」

「なにが起こるんでしょうかね」

「ただいま！」

「おかえりなさい」

「はい、コーラとお茶」

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「で、何の話してたの？」

「いや、ここに陽麗学園の生徒が多いなって」

「ああ、そうね」

「何か起こるんでしょうか？」

「たぶんね、面白そうね。ねえ、調べてみない？」

「え？」

「先輩私もやりたい」

「じゃあ月麗学園生徒会みんなで見回りでもしましょう」

「えーやめましようよ。せっかくの休日なんだから」

「いいじゃん面白そうなんだから」

めんどくせー

「じゃあみんなサボらないようにしてくださいね」

「……はーい」「……」

これから個人で見回りをすることになった。それにしてもだるいな。早く終わらせたい……。さ・てどうやって調べようかな。そこらへんにいっぱいいるし喧嘩か。ここにそんな勢力をもった不良なんていないし……。何やってんだろう？

「おい、あいつらを見つけたか？」

「いや、まだだ」

「そうか、急げよあの人が頼んでいるんだからな」

「ああ、分かった」

人探し？ この町で人を見つけるのって難しいと思うんだけど。でも誰だ？

『正々堂々と学校を襲ったら来るんじゃないか』

『それいいな』

・ここにいます

・学校を襲う

・ここにある学校……月麗学園

危ないじゃん。あいつら学校のほうに行ったし。部活をしている

生徒がいたら……。危ない！

「もしもし、会長さん」

『はい、何でしょうか？』

「学校が危ない！」

『学校？ 何が危ないんです？』

「たぶんあいつらの目的は月麗学園の誰か、そいつを誘き出すために学校を襲うみたいです」

『分かりました。ではみなさんのほうにも連絡しておきます』

「よろしくおねがいします。でわ……」

ブツッ

よし俺も行くか。

「<光速操作>」

ってことであいつらを抜いてきてさきに学校に来たわけだが、狙いは誰なんだろう？ それよりも。

『えーと、ごほん。生徒会副会長の高坂です。今この学校に残ってる生徒は急いでこの学校から出て！ 片付けなんていいからはやく！』

これで連絡が終わった。後はみんながこの学校から出ることに。

「あ、大河くん、放送は？」

「やっておきました。あとはみんな出るだけです」

「よかったです。来る途中陽麗の人たちが携帯で連絡した後でこっちに向かっているのが見えました」

「そうですか、やっぱり狙いはこの学園の人……」

「そうですね……」

「おい、お前らここの生徒か？」

「この制服……陽麗のやつら。しかも2人もう来たのか。」

「そうですけど、何か用ですか？」

会長がそう言つと男は……

「そうかごめんな、ちょっとばかり怪我をしてもらうぜ！」
「そうですか、残念です…… <空間移動>」
「え？」

男はいきなり空にレポートされて真っ逆さまに落ちていった。
「て、てめー何しやがる！」

「うるさいですね…… <睡眠空間>」

男は結界に囲まれたと思ったたらいきなり寝た。なんだこの能力……
「おい、なんだたかだか女だぜ、みんなで囲めば大丈夫だろう」
そう言っつて仲間たちが来た。そろそろ俺もやりますかな。

「テーマ等いい加減にしとけよ…… あれ？」

「あら？ 手助けは無用です」

会長が全員倒してしまった。10人ぐらいいたけどすぐに倒して
しまった。会長って本当に最強だな。

「増援ですか、めんどくさいですね。大河くん手伝ってください」

「了解です！ <光の弓矢>！」

「お願いします！ <空間移動>！」

「これで最後ですね」

「そうですね <空間結界>」

「た、助けてくれ」

「これから言う質問に答えたらな、誰を探してるんだ？」

「月麗学園の生徒会のやつらだよ」

俺等？ 何かやったっけ？

「目的は？ 誰に命令された？」

「い、言えるか」

「じゃあ会長お願いします」

「はい、<空間……>」

「分かった、言う言うから」

「それでいい」

「命令したのは陽麗学園の生徒会長さんだ、目的は分からないけど、俺のところに連れて来いとしか聞いてない」

「そうか……」

陽麗学園の生徒会長か……

「じゃあ会長、解除してください」

「<結界解除>」

「よ、よかった」

そういうと男は走って逃げた。そうして奈々たちが来た。

「え？ どうしたの人がいっぱい倒れてるけど」

「襲ってきたから倒した」

「やるじゃない2人とも」

「お、おつかれさまです」

「それよりも、俺たちは陽麗学園の生徒会長さんに狙われてるみたいだ」

「何で？」

「知るかよ」

「で、それで会長さんはどうするの？」

「陽麗学園に行くつもりです」

「そう、なら私も行くよ」

「俺も」

「私も」

「ぼ、僕も」

「じゃあ明日にでも。みなさん明日に向けて今日は休んでください」

って事で解散したけど、陽麗のところの会長に何もしてないから

俺たちが目をつけられたのはおかしい。なんでだ。

陽麗学園（前書き）

久しぶりです！ 最近はずっとテストがあつて書けなかつたので……
久しぶりに書いたので変ですよ？

それでもいいならみなさん見ていってくださいね

陽麗学園

次の日俺たちは陽麗学園に乗り込んで生徒会長さんに襲った訳を聞きにいった。

「ここが陽麗学園ですか……」

校舎のガラスが割れていたりいっぱいゴミが落ちていたりいろいろ荒れてた。

「ええ、ここが陽麗学園ですよ。……あと簡単に入れてもらえそうにないですね」

「そうですね」

「テメー等月麗の奴等か？ まあ、あの人が言ってるんだからそうだろうけど。やるうどもこいつ等をやるぜ！」

あの人？ 陽麗の生徒会長か？

「久しぶりに腕がなるわ」

「あ、あれ全部陽麗の人たちですか……」

「私自信がないけど頑張ります！」

「じゃあ、いつちよやりますか。＜聖者の剣＞」

陽麗の内の1人が木刀で突っ込んできた。

「木刀では勝てないぜ」

「グハッ！」

木刀ごと切った。

「どんだけいるんだよ」

たぶん100人以上はいるかな？

「めんどくさいですね……＜空間結界＞……＜空間移動＞」
会長さん凄すぎだよ……

「＜火炎弾＞&＜火炎屏風＞！」

こっちも凄すぎ……

「ご、ごめんなさい＜アイスボックス＞」

こっちは人を氷に埋めちゃったよ……

「<落雷>!!」

もしかしたら俺以外全員化け物か？

俺も負けてられないな。

「<光速制御>!!」

「さすが大河くん速いですね」

「ふ〜こいつで最後つと」

これで全員倒した。

「でも校舎の中にもいると思いますよ」

「簡単にはとおしてくれないらしいですね」

「どうしますか会長さん？」

「どうするって言われても陽麗の会長は私たちのことを監視しているからコソコソしないで堂々と探せばいいんじゃないんですか？」

「そうですね」

「あと相手が襲ってくるようなら思いっきりやっていいですから」

ニコニコ笑いながら何言ってるんだこの人は。

「では行きましようか」

「……はい」

それから俺たちは校舎に入った、そしたら会長さんの読みどおり生徒がまだいた。まあ、会長が手加減せず全員倒しちゃったけど……

まあ、四天王みたいなキャラは出ずにすぐに生徒会室に来ることができた。

「みなさん心の準備はできてますか？　もしかしたら入っていきなり勝負になるかもしれないですからね」

「俺は大丈夫ですよ」

「私もです」

「私も大丈夫よ」

「ぼ、僕も」

「では行きますよ」

「バタンツ！」

「月麗学園生徒会です！ 陽麗学園生徒会長さん、私たちに何か用があるんですか？」

そこには幾つかのモニターがあつてそこには俺たちの姿が映つてた。会長と思われる人は俺たちとは反対の場所を向きながら椅子に座っていた。

「……………」

「答えてくれますか？」

そう会長さんが言つと椅子がこっちを向いた。

「！！、皆さん私のところに来てください」

「どうしたんですか会長」

「いいから早く！」

そう言つて俺たちは会長さんのところに近づいた。

「<空間移動>」

「え？ ちょ！」

会長はこの学園のグラウンドに俺たちを移動させた。

「会長何であそこまで行つたのに外に出たんですか？」

俺がそう言い終わると同時に校舎……生徒会室が爆発した。

「そういうことですか」

「だったら生徒会長はどこにいるんでしょうかね」

と奈々が会長さんに聞いてみた。

「分かりませんね、たぶん何処かで私たちを監視してると思います」

「へーよく分かつたね」

「誰！」

その人はいきなり現れた……能力は瞬間移動か。

「んー僕の能力は瞬間移動じゃないよ」

「！！！」

心が見透かされてた。心を読む能力なのか？

「いやそれも違うよ。僕の実力はね、『幻術』……まあ、その名前のとおりだよ」

「幻術を使って俺たちに気づかれないように近づいたと」

「そーそのとおりだよ」

「じゃああの爆発は？」

「あーアレはね時限爆弾だよ」

「はい、じゃあ倒されてください<空間移動>」

いきなり会長が陽麗の生徒会長を空高くに瞬間移動させた

「んー話は最後まで聞いてね」

「！」

「今のは幻覚だけど？」

「で、話ってなんですか？」

「うん、話はね今回なぜ僕は陽麗の生徒を君等のところに向かわせたかだよ、理由は簡単、ただの暇つぶしだよ、あと君たちはどれだけ強いのかね。君たちがここにきたのは予想外だったけど、まあ楽しかったよ」

「戦争でも起こすつもりですか？」

「んー戦争か……面白いね。でも今は戦争する時ではないかな？」

戦争はまた今度ってことで

「戦争なんてやりませんよ。とりあえず用件は終わったので帰りませぬ。月麗学園の生徒に手をだしたら許しませんよ」

「わー怖い、怖い。でも分かったよ。じゃねー」

会長の顔はまるで感情がないかのように無表情だった。でもあの陽麗の生徒会長……要注意だな。たぶんまだ秘密がたくさんあると思う……。それに誰も言っていないけど陽麗の会長以外に人の気配がしてた。

「いやー疲れたなー」
「つたく、何で爆発させたんですか……」
「べつにいーじゃん」
「ハァーため息がでます……」
「元気だしてね」
「それに『幻術』は会長の能力じゃないでしょ！」
「んゝそうだったっけ？」
「そうですよ！ あれは私の能力ですよ！」
「そうだったんだ」
「これだから会長は……」

遅刻とお話（前書き）

サブタイトルが思いつきません……
あと今回は短めです

遅刻とお話

休日が終わわり学生たちは学校に向かう。俺もまたやる気のないまま学校に向かう。

この休日はいろいろあったせいで休めていない。

「ハア……」

「なーにため息ついてんのさー!」

「いたっ! 雛森先輩! 後ろから叩いてこないでください、ビツクリします」

「あ、いいのかな? 忘れてるみたいだけど。今日の朝、生徒会が校門前であいさつする日だよ」

「え? 忘れてました! じゃあ急ぎましようよ!」

「いいよ面倒くさいし……」

「いいから! 一応生徒会役員でしょ! 早く!」

「ねえ! 一応って何! 一応って!」

「ハア……ハア……スミマセン遅くなりました……」

「遅いよ後輩くん!」

「スミマ……って、先輩も遅かったでしょ!」

「え? そうだったけ?」

「そうですよ!」

「まあまあ、大丈夫ですよ、間に合いましたし」

「よかった……」

無事遅れず到着して、あいさつも終わり俺たちが自分の教室に向かおうとしたとき会長に呼び止められた。

内容は

今日の放課後すぐ生徒会室にきてらしい。たぶん陽麗のことについてだと思っ……

教室に向かい。俺たちが席に着くと同時にHRを始めた。俺は先生の話を無視して考えていた。

陽麗のことか……

そんなことを考えてると睡魔が俺を襲った……

気がつく俺は俺は寝ていて教室には誰もいなかった……

「あれ？ 誰もいないの？ 今の時間って体育？」

と思つて時間を見てみた……

「えー！ もう放課後じゃん！ 何で誰も起こしてくれないの！ 奈々は！」

そう言つたあと机に紙が置いてあることに気づいた。

「ん？ えーと」

『大河が中々起きてくれないから先に行ってるね 奈々より』

「はあ！ 急がないと！」

全力疾走で生徒会室に向かった。

ガタンッ！

「遅くなりました！」

「大河もまた遅刻だよ」

「遅いよ後輩くん！」

「うっ……今度は先輩の言ってることが正しい……」

「遅れた罰としてジュース買ってこい！」

「えっ、嫌ですよ」

「葵さ、一言いってよ」

会長を呼び捨て……

「えーと、そうですね……次は遅れちゃダメですよ」

「分かりました」

「一件落着ですね……それでは本題に移りますか」

「本題というのは陽麗のことについてです」
「やっぱり……」

「昨日行つて分かつたと思いますが、陽麗学園は荒れてます。生徒会長も要注意です。たぶん本当にあの人にとつてあれは暇つぶしだったのでしよう。推測ですがあのひとはとうぶん私たち月麗学園を襲つてこないと思います。彼の言葉が本当なら」

「じゃあ、とりあえず安心して学園生活をおくつてもいいんですか？」
「？」

「はい、安心してください」

「よかつた……」

「あ、私からも質問です。このことつて全校に知らせるんですか？」

「それはまだいいです」

「分かりました」

話はこれだけ。この日はみんな雑務をしないで帰つた。理由はたぶん休日ちゃんと休めなかつたからだろう。俺は家に帰りすぐベッドに向かい寝た……。

体育委員長（前書き）

最近文才が悪くなってる気がします……（元から悪いけど）

そんな俺の作品でよかったら見ていってください

体育委員長

次の日俺は普通に学校に行き、普通に授業を受け、普通に生徒会室に向かった。

コンコンッ

「入りますよ」

「どうぞです」

「？ 話中ですか？」

「今終わったから入ってきてもいいですよ」

「分かりました」

「じゃあ生徒会長この件よろしくお願いしますね」

「はい、分かりました」

「では失礼しました」

そして一人の生徒が出て行った。そして俺は生徒会室にある自分の机に座った。

「あの人って体育委員長さんですか？」

「はい、いろいろ必要な物があるからその申請をしにきたんです」

「へー。あ、あと、他の人って来てないんですか？」

「さつきから体育委員長さんと二人で話していたので誰も入っていないと思いますよ」

「……………」

「……………」

……………「気まずい。何も話す内容がない。」

「あ、あの、今日の活動って雑務だけですか？」

「今日は雑務だけです」

「……………」

「……………」

「また、気まずくなっちゃった……………」

コンコンッ

「失礼しますね。保健委員会委員長、高橋咲穂たかはし さきほです」

「どうぞ、入ってください」

「今回の用事は能力バトルの手当てのことです」

「その件ですが……………」

そこから二人で話していた。俺は完全に蚊帳の外だな…………。

「ありがとうございます。あと、その男の人って副会長さんですよ？」

「え、あ、はい……………」

「噂通りの人ですね。今後の活躍期待してますよ」

「あ、ありがとうございます……………」

「では失礼します」

噂？ 何のことだろう？

ん？ 廊下から誰かが走ってる音がする？

雛森先輩か？ しかたない……………注意するか…………。

俺はそう思い廊下に向かおうとすると…………。

バタンツ！

「ハア…………ハア…………し、失礼します……………」

先輩じゃないのか…………それにしても今日はいつもよりお客がくるな…………

「そんなに走ってどうかしたんですか？」

「そ、それが！ 今三年の校舎で喧嘩が起きてるんです！」

「！ 大変ですね。他の下級生なら上級生が止めに入れますが、上級生同士の喧嘩は誰にも止められませんね…………大河くん、今すぐ行きましょう」

「了解です」

そして俺たちはすぐその現場に向かった。今は放課後でそこらへんに生徒がいて邪魔だった…………。

「生徒会で……………」

……と俺が言おうとしたら一人の生徒が……。

「何でここ喧嘩してるんだ？ 通行の邪魔だぞ？」

この人は……体育委員長？

「んだと！ テメーヤんのか！」

「やるも何も通行の邪魔だから忠告しただけだぞ？」

「ウゼー！ 殺す！ 俺の能力を甘く見るなよ！」

「……もう一つ忠告だ、俺は体育委員長、福原颯……」

「そうか……委員長か。でも生徒会よりは弱いんだろ！ なら俺にも勝ち目が……」

「お前は少し勘違いしてるぞ？ 俺たち委員長は生徒会より弱いんじゃない、委員長は委員会の“使命”にあつた能力、つてのが委員長になる条件なんだ。だから俺は体育委員長になった。委員長たちも生徒会に肩を並べるほどの実力があるんだぜ。まあ、生徒会長は学園一位の実力なんだがな」

「……じゃあ俺と力比べしようぜ！ <土棺>！」

「最後に言うが俺は忠告したからな」

福原先輩の真下から土の棺がでてきた。

「一生その中で眠ってな！」

「その程度か？」

！

たぶんこの場にいる全員がビックリしたと思う。俺の<光速制御>よりは遅いと思うけど速い……。

「じゃあ次俺の番な。<部分肉体強化>」

福原先輩は拳を構え、拳を相手の当てた……

凄い……相手が凄い勢いで吹っ飛んでいった……。

「お前もやるか？」

「す、すみませんでした！」

もう一人の喧嘩していた相手は走って逃げた。

「やっちまったぜ……手加減したつもりなんだが……生徒会にバレなきゃいいよな」

「生徒会にバレたら危ないですね」

「そうだよ反省文とか書かされ……あ！ 会長！ 見てたんですか
！」

「見てましたよ最初から」

「ちくしょう……ただ忠告しただけなのに……」

「さあ、生徒会室で反省文を書きましようね」

そのまま福原先輩は生徒会室に連衡された……ドンマイです……。

それにしても福原先輩の話……委員長のこと初めて知った……。

まあ、俺が先輩たちより強いわけないしな。

「シッシシシ。面白い記事だね」

新聞委員長

翌日俺が学校に着くと掲示板に人がいつぱいいいた。

どうしたんだ？ 面白い記事でもあんのか？

そう思い俺は掲示板に向かった。

そこには……

委員長、一般生徒に手を出す！

つていう見出しで下には

Aさんの証言　いきなり俺たちを殴ってきたんですよ！

……つて書かれていた。絶対昨日の福原先輩のことだ……でもいきなり殴ってないし、先にあっちから攻撃したし完全な嘘っぱちだ。

ん？ どうしたそんなに群がって……何だこれ？

「あ、あの先輩……」

「……」

「大丈夫ですか？」

「あ、お前は新しい生徒会役員だよな。俺は大丈夫だ。ちょっと頼まれてくれ。会長に反省文の紙用意しとけて言っておいてくれ」

絶対この記事を書いた新聞部に乗りに込む気だな……

「ちょ、ちょっと待ってください！ その件なら生徒会にまか……」

「この記事は俺のものだ。だから俺が解決させる」

聞く耳持たず……

「じゃあ僕がついていきます」

「いいのか？ よし！ じゃあ俺と一緒に潰しに行こうぜ！」

やっぱり潰すのか……

「失礼するぞ！ 体育委員長の福原だ！ 新聞委員長いるか？」

「いますよ、あそこに」

「ありがとう」

先輩が居場所を聞き新聞委員長に近づいた。

「お前が書いたんだな、この記事を」

「クツクク……さー？ 何のことかな？」

ウザい……惚けてる。

「そうかなら力づくで……」

「……顔を狙うね。ダメだよ乙女の顔を狙っちゃ」

「！……そうだったな長谷川里香^{はさがわりか}」

「クツクク……私の能力だよ。……その生徒会新役員さん、私は新聞委員長、能力は感情・記憶を読み取る能力だよ。よろしくね……クツクク」

……ちよつと怪しそうな人だな。

「因みにこの学園の生徒の心を読むことができるぞ。だが生徒会の人間の心を読むことは禁止されてるけどね……クツクク」

残念だね。……と長谷川先輩が言った。この全校生徒の心を読むことができる……それで福原先輩のやつも分かったのか。そしてその能力の高さが“新聞委員長”に選ばれた理由だろう。

「クツクク……安心しなよ。君の心の中を読んだら生徒会長さんに殺されるかなね」

「そうですか。で、本題は終わっちゃいませんよ。この記事を書いたのは先輩じゃないですか？」

「生徒会の人間に嘘は吐けないな。そうだよ私が書いたよ。それで何だ？」

「やっぱりそうなんですな。それじゃあ生徒会室に来てください」

「福原先輩はいきなり殴ってないです。っていつかあいつ等が先に殴りかかってきたんですよ。それなのに長谷川先輩は嘘の記事を書いた」

「それは私の能力が原因で間違えた」

「嘘ですね。委員長級の人が間違えるなんてありません」

「ほお……面白い奴が生徒会に入ったな。ただの嘘の記事にこれほど食いつくとは」

「次から嘘は書かないくださいね。今回は注意だけです」

「クツクク……優しいな。じゃあ嘘は書かないよ。用はそれだけだろ？ じゃな〜」

「失礼しました……」

「俺はテメーの顔を殴らなきゃ気が済まないけどな」

新聞委員長つてああいう人なんだ……

……やっべ。HR始まるじゃん！ 急がなきゃ……

理不尽な喧嘩？（前書き）

やっぱりサブタイトルが思いつかない……

理不尽な喧嘩？

ふ〜セーフだ……

「大河？ どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

「そう？ だったらいいけど。また厄介事に巻き込まれたと思ったよ」

「アハハ……」

その厄介事に巻き込まれたんだよ……

放課後になり俺と奈々は生徒会室に向かう。

……行く途中みんなが俺のことを笑っているように見えた……。
気のせいかな？

「入りますね〜」

「どうぞ」

「来たね後輩くん」

「何で笑ってるんですか？」

「え？ 何も聞いてないの？」

「だから何ですか？」

「じゃあ今すぐ掲示板に行ってきたな」

？ 何だろう……

掲示板に一つの紙が張られてた。

えーと。

果たし状！

今日の放課後校舎裏にて待つ！

一人で来るように！

来なかった場合は……

来なかった場合は何だよ！

っていうか何で？ 俺誰かに喧嘩売ったっけ？ 思い出せない……
仕方ない行くか……

「よく一人で来たな！」

「ああ、あと俺何か悪いことしたか？」

「しただろう。新聞委員長に言われて確信した。お前は生徒会役員の女子全員と付き合ってるってな！ 新聞委員長が言ったんだから嘘ではない！」

「新聞委員長……それは嘘だ。信じてくれ」

「たとえそれが嘘だろうとお前は生徒会というハーレムを毎日楽しんでるだろ。憎い……モテない男子の気持ちが分かるのか！ 行くぞヤローども！」

「……おおー！」「……」

「げっ……いっばいいやがる……」

『死ねリア充』

『死ねこのイケメン』

『大人数だったらこっちにも勝機はあるぞ！』

『全軍突撃だ！』

「……了解だ！」「……」

うわっ！ マジで全軍突撃しやがった！ 仕方ない…… <光速制御>。

「速い！」

「これが副会長の実力なのか！」

「でも大丈夫だ！ 俺たちが力を合わせれば倒せる！」

面倒くさい……一発で決めるか……一般生徒に新技を使うのは不本意だが……仕方ない。

「…… <流星群>」

その名のとおりの俺の能力で作りに出した流星。

「みんな恐れるな！俺たちが協力すれば相打ちにはできる！みんなやるぞ！」

「「「おお！」「」」

「＜理不尽な怒り＞！」

その名のとおりの理不尽だよ……でも相手も強そうだな。もうちょっと本気ですか……集中……集中……

「あれ？大河くん？ここで何をやってるんですか？」

「か、会長！」

ビツクリして能力を解いてしまった。

「危ない状況ですか？手伝いますよ。＜結界＞」

会長が作った結界を盾にしてあいつ等の攻撃を防ぎ、俺は＜光速制御＞で油断してる相手に近づき気絶させた。

「会長、ありがとうございます」

「いえいえ。それよりも何かあったんですか？」

「ええ、まあ、はい……」

「もしかしてあの掲示板の？」

「知ってたんですか！？」

「ええ、でも冗談だと思って警戒してなくて……すみません」

「いや、会長は謝らなくてもいいですよ」

「そう言うなら……それでこれどうしましょう？」

「ああ、別にどこかに運ばなくてもいいですよ。起きたら家に帰ると思うんで」

「そうですね。では生徒会室に行きましょう」

「はい」

「で、どうだった？」

「どうだったって……普通に倒しましたよ」

「な～んだ、少しくらい攻撃喰らってもよかったのに」

「嫌ですよ、痛いし」

「それじゃあ私があいつらの敵を……」

「もしかして先輩が長谷川先輩と組んだんですか！」

「何で私がやらなきゃいけないのよ。しかも新聞委員長と」

雛森先輩は少し嫌な顔をして答えた。

「しかも？ 先輩は長谷川先輩が嫌いなんですか？」

「もちろん！ っていつかこの学園であいつのことを好いてる人なんているの？」

「いないと思います……じゃあ何で嫌いなんですか？」

「理由は後輩くんと一緒、とある生徒たちに可笑しな情報を流して、私を襲ってきたの」

「じ、実は僕もです……」

晴樹先輩も……。

「前々から長谷川さんの新聞は悪評だったんですよ……」

「どうすればいいんだろう……。一発ぶん殴るか？ でもあくまで女子だしな……」

「……私まだされてないんですけど……もしかしたら次のターゲットトって私の確立が……」

「……高いな」

「葵！ 考えただけでムカつくから殺してくる！」

「雛森さん、ダメですよ。その長谷川さんの件は私がどうにかしますから、みなさんはもう帰っていいですよ」

「で、でも雑務が……」

「いいですよ、今日はお休みです」

「分かりました……」

会長が言ったので俺は帰る準備をした。

「それじゃあ私と晴樹はさきに行くぞ」

「さようなら」

「じゃあ私たちも行こうか」

「分かった。会長、さようなら」

「さようなら、また明日」

次の日、学校に來ると長谷川先輩が俺のところに来た。何かまた喧嘩でも売りにきたのか？

「あ、ご、ごめんなさい！」

「はあ？」

何かの冗談か？ 演技？ でもマジで足がガクガク震えてる……
「昨日はスミマセンでした！」

会長か？ 俺たちが帰った後に長谷川先輩のところに行って……
脅迫？ あと口調がいつもと違うし……。

まあ、いつか。もう喧嘩を売ってこないだろうし。

告白！？

何だろう……この光景前に見たような気がする……。

「俺たちと勝負だ！」

何がこのバカ共。学習能力がないのか？

「この前は生徒会長が来て助かったみたいだな。だが今回は会長は来ない！ 正々堂々と勝負だ！」

正々堂々の意味を分かっているのだろうか？ 大人数の生徒対一人の生徒だぞ。こっちが不利じゃないか。

「今回も長谷川先輩が二セ情報を流したのか？」

「いや、今回はリベンジだ！」

そうか……。

「しょうがない……とつとと終わらせてやる。かかってこい」

「そんな上から言えるのはこれで最後だぞ！」

「<光の刀>&<光速制御>」

「……何だ何処も切っていない……！！！」

「確かにお前らは切っていないな。まあ、制服は切ったけど今の奴らの格好はパンツだけだ。」

「これ以上やるか？ やるならパンツ切るけど？」

「……スミマセンでした」

ん。教室に向かうか。

「……って言うと思ったか！」

「<光の刀>」

最後の一枚を切った……何故朝からこんな汚染物を見なきゃいけないんだ……。腹いせに止めをさすか……。

「最後だ……<光の銃>」

「……スミマセンでした（ガクガク）」

もう言わないだろう。今度こそ教室に行ける。

.....視線？ 誰かが俺の後を追ってる？

「.....」

「.....」

まだ追ってくる。さっきの奴らか？

「.....」

「.....」

仕方ない.....

俺は右に曲がった。そこで待つ。

「.....！」

「おっと逃げられないぜ。お前は誰だ.....って女！」

男だと思っていた.....

「わ、私一年生の白井葉月です。あ、あの、良かったら私と、お、お付き合ってもらえませんか？」

「え？」

「わ、私の彼氏になってくださいです.....」

「意味は分かるけど、何で俺？」

いきなりでかなりビックリしてる.....

「理由ですか？ 理由は恥ずかしくて言えません.....」

「そう.....あと、俺たちって初対面だよね？」

会った覚えがない.....。

「覚えてないんですか？」

「覚えてる？」

会ったことあるのか？

「ならいいです。覚えてなくても私はあなたのことが好きですから
気になる.....。」

「べ、べつに今すぐ答えをださなくてもいいですよ」

「うん.....分かった.....」

告白っていうのが初めてでかなり緊張した。男で後ろから襲われると思ってたから.....告白なんて予想してなかった.....。

「ハア……」

「これからHRをはじめめるぞ……おい、高坂具合でも悪いのか？」

「え？ ああ、はい……」

「それなら保健室に行つて来い」

「分かりました……」

「失礼しまゝす」

「どうぞ。つてあれ？ 大河くん？ 久しぶりね」

「お久しぶりです」

前は能力がなくていっぱい怪我をした。まあ、保健室の常連だったんだ。

「何？ 生徒会の仕事のやりすぎ？」

「いえ……今日はただ具合が悪いだけです……」

「そう、じゃあその開いてるベッドで寝てなさい」

「はい」

一つは先客がいたから違うベッドで寝た……。

「あ、そうそう。あともう少ししたら私は帰るから」

「了解です」

さーて寝るか……

「あ、あの！ 大河くん！」

「……………え？」

何でここにいるの？

「いつ来たの？」

「私は最初からいましたよ？」

「つてことはもう一個のベッドにいたの？」

「はいです！ で、あの、二人つきりですね……」

二人？ つてことは先生はもう行ったのかな？

「そ、それで答えは……」

「答え……」

白井さんは可愛い……けど俺は……。

「まだですよね……」

「俺の答えは……ゴメン！」

「それは遅くて謝ってるんですか？ それとも私とは付き合えないから謝ったんですか？」

「俺は付き合えない……」

「そうですか……」

「何というか俺は恋っていうのに疎いんだ。だから付き合うつとかよく分からないんだ」

本音は付き合ったら全校の男子に殺されそうだから……

「分かりました……でも私は諦めませんよ」

と、白井さんは笑いながら言った。

「……………スクープ。今回は許されるよね？」

その後俺は教室に向かった。

「ちよ〜と痛いかもしれないけど我慢してね」

と、奈々が怖い笑みを顔に浮かべた。

「<放電>!!」

「ぎゃああああああああああああ!!」

そのまま俺は気絶した……。

「……………まあ、告白を断ったみたいだからこれぐらいで許してあげる」

生徒会新入り？

……………何だ？

俺の隣に違和感が……………。

何故か俺の隣には白井さんがいる……………

いるだけならいい……………何故俺にベツタリとくっついてるんだ？

そのおかげで周りからの視線が痛い……………

先生も何か言っつてよ！ 「自分の教室に行きなさい！」 っつて！

しかも笑ってるし！

次の時間は体育か……………

そして何故くっついてる！

動きにくい！

「なあ、何で俺にくっついてるんだ？」

「だって大河くんのが好きだからです！」

「ハア……………」

えーと次は理科か。

予想はしてたけどさ！

何でくっついてくる！

ハア……………次は

こんな感じで放課後になった……………。

「白井さん、放課後になったんだから離れて」

「私帰宅部でやることないからずっと一緒にいますよ」

「俺は生徒会だから無理なんだ」

「そうなの？　じゃあ私も生徒会に入ります！」

「それは無理だよ。まあ、会長がOKしたら入れるかもしれないけど……」

「……………」。

「いいですよ？」

「会長！　ここはダメって言うてくださいよ！」

「ちよつと面白そうだったんでつい……」

「何で！　俺に味方はいないの！？」

「み、みなさんこれからよろしくお願いします！」

「よろしく〜」

「よろしくね」

「よろしくお願いしますね」

「よ、よろしく」

「反対の人は俺だけなの！」

「後輩くん……明日から頑張ってるね！」

「この人凄く笑ってる……」。

「えーと、会長？　冗談ですよね？　ちよつとした気の迷いですよね？　冗談って言うってください！」

「じゃあ、自己紹介してください」

「はい、私は一年A組の白石葉月です」

「え？　同じクラスだったの？」

「初耳だ……」。

「大河！　知らなかったの？」

「知らなかったのですか……」

「ご、ゴメン……」

「しょうがないよ、大河は人を覚えるのが苦手なんだから……」
返す言葉がない……会長の名前も分からなかったからな……。

「シヨックですけど自己紹介を進めます……最近の趣味は大河さん

の観察です」
「俺観察されてたの!」
「はいです」
「いつから!？」
「一週間ぐらい前からですかね……」
「そうだったの……」
「気がつかなかった……。」「
「能力はく機械操作>です」
機械操作?」
「私の能力は名前通りです。そこにパソコンありますよね。見ててください」
「まだまだですよ」
「続いてパソコンに触れないでパソコンを操作している……。」「
「これだけじゃないです!」
「次はハッキング!？」
「凄い……」
「これで葉月ちゃんが入るのに反対する人はいないよね!」
「いないと思うよ」
「ってことで、ようこそ生徒会へ」
「反対しても意味がないからもう反対しない……。」「
「よろしくです。大河さん」
「え!？」
いきなり抱きついてきた。
会長と奈々はちよつと怒ってる?
雛森先輩は笑っている……
晴樹先輩は顔を真っ赤にして顔を隠してる……
やっぱりこの生徒会は俺を助けてくれる人はいないらしい……

次の日の全校朝会で白井さんが生徒会に入ったことを報告すると、
凄手数に殺気が俺に向かってきた……。ハア……。また厄事が増え
るぞ……

奇襲？（前書き）

うん……今回も可笑しくなったね……

どれだけ変にすれば気が済むんだろう……

奇襲？

ベタベタ

ベタベタ

……………何の罰ゲーム？

何でまだくつついてるの？

何で分かってくれないの！

「ハア……………」

「？ どうしたんですか？」

「いや……………何でもないよ……………」

できれば自分で気づいて欲しい……………。

前回同様、クラスの全員の視線が痛い。

『大河……………いつか殺してやる』

『大河くん、またあの子とくつついてる……………』

そのような言葉がさっきから聞こえる。

今はクラスだけじゃなく、全校からの視線が痛い。昨日の全校朝

会では……………

『一年の白井葉月です。今日から生徒会役員として頑張りたいです』

ここまではよかった……………

『因みに副会長の大河くん付き合ってます』

『……………！？』

『……………今はまだですが』

言うの遅い！ ってか、この先付き合うつつもりないから！

「ハア……………」

「本当に大丈夫ですか？ 心配です……………」

「心配をしてくれるなら今すぐそこをどいてください」

「いやです」

「何でなの？ 白井さんはそんなに俺をいじめたいの？」

「いじめてませんよ？」

もしかして無自覚なのか？

「でも周りの人に大河くんと付き合ってるように見せてるだけです」
「それがいじめてっていうの！」

「何ですか？」

「それは……嫉妬に狂ったクラスメイトが俺を殺しにくるから……」

「え！？ そうなんですか！？ それは危険ですね……」

「だから離れようね……」

「うう……分かりました、今は我慢します……」

今だけじゃなくてこの先ずっと我慢してほしい……

やっと白井さんは離れてくれて、授業に集中できた。

そして授業が終わり放課後になって俺と奈々と白井さんは生徒会室に向かった。

「……ねえ、葉月ちゃん。大河が困ってるよ」

生徒会室に着いた瞬間、白井さんが俺に抱きついてきた。

「奈々！ 助けて！」

「私的にはこの光景は嫌いだけど、助ける気になれないし。まあ、頑張ってる」

「嫌いなら助けてもいいじゃん！」

「……………」

完璧無視されてる……。

会長は？ 会長なら助けてくれる。

と、俺は思い会長のいる椅子に目を向けるんだけど会長はいなかった。

「なあ、奈々。会長って何処にいるか分かる？」

「何にも聞いてないよ？」

「そーか」

「まだ私たちだけだね。先輩たち遅いね」

「ああ」

早く来て俺を助けてくれ……。

一時間後……

「……遅くないか？」

「確かに遅いですね……」

「うん……どこかで何かやってるのかな？」

「何か……また事件が起きたとか？」

「たぶん事件だね。今から探しに行く？」

「まあ、暇だし探しに行くか……」

「あの……探しに行かなくても私の能力で探せますよ」

白井さんの能力……ああ、機械操作か。それで監視カメラの映像で探せば……。

「じゃあ、お願いしてもいいかな？」

「もちろんですっ！ ちょっと待っててくださいね」

「……あれ？」

「ん？ どうしたの？」

「おかしいんです。一箇所だけ映し出せないんです。故障でしょうか？ それとも……」

それとも壊されたか……。

「よし、じゃあ今からそこに向かおうか」

もしかしたら先輩たちはそこにいるかもしれないし。

「ちょっと心配だね……」

「大丈夫だよ、先輩たちは強いんだから」

「そうだよね……」

「じゃあ行こうか」

「うん」

そして俺はドアを開けた。そしてそこには……。

「おい、テメーがこの学園の生徒会か？」

「……部外者か？」

「だったら？」

「その様子だと無断侵入だな。生徒会役員としてお前を拘束する」

「へー、面白いことを言うんだな。この俺を拘束か？ 笑わせるな」

「あと二つ質問していいか？」

「何だ？」

「会長たちを何処にやった？」

「テメー等の会長さんたちは俺の仲間と遊んでるだろうよ」

「じゃあもう一つの質問だ。お前は陽麗学園の生徒か？」

「もちろん俺は陽麗学園の生徒だ。この紋章が見えないのか？」

陽麗は太陽、月麗は月、星麗は星の紋章が制服についでる。

「そうか……じゃあ俺も手加減しないと。今日も暇つぶしとかだろ？ だったら俺がその暇つぶしに参加して全員倒してやんよ」

「じゃあまず俺を倒すんだな」

「奈々と白井さんは逃げて」

「了解」

「うん……」

「ひゅーう。かっこいいね」

「……………」

「じゃあ始めるか」

「手加減はしないぜ」

「それはこっちの台詞だつての！ <槍の雨>」

俺の上から槍が降ってきた……が、俺は動揺せず光速制御をつかって避ける。

「ほー、結構やるじゃないか。これならどうだ？ <電槍>」

たぶん推測だけど、あいつの能力は槍を操る能力。だから電気はオプションで奈々みたいに操作できないはず。威力も奈々のほうが強いと思う。ここで勝負だな。

「光を纏えく聖者の剣>！」

「相打ち狙いか？ 残念だがお前の剣は俺には届かない。<槍地獄>」

相手は途中で止まり槍を地面に突き刺した。

「何をやって……いつ！」

いきなり下から無数の槍が俺目掛けて突き刺さってきた。

「残念ながら気づくのが遅かったな」

「……………」

「さー俺も本気だそうかな……………」

「本気？ まだ本気じゃなかったのか？」

「テメー相手に最初から本気だすわけないだろ」

そう言いながら俺に突っ込んできた。そして俺は最小限の動きで避け攻めに転じようとしたとき、俺の体に槍が刺さっていた。

「何で？ て顔をしているな。簡単な話だ、俺が突っ込んでいったのフェイントその後の攻撃が本命だ」

その後の攻撃？

「突っ込んだ後俺は体から槍をだしお前を刺した」

「ってことはアイツに近づくだけで刺される……………」

「<光の銃>」

遠距離の銃ならどうだ？

「ふんつく槍の壁>、そんな生温い玉で俺の槍を壊せると思うな」

「誰もこの銃で壊れるなんて思ってたねえよく粒子砲>」

粒子砲は強いが上手く狙いがつけられないから……………。でもあんな大きな的なら捉えられる。

「あつぶね！ ったく！ いい加減死ね！ <怒りの槍>」

見るからに強そうだ……………。何の仕掛けもないパワーだけを追求した一本の槍……………。

「接近戦なら<聖者の剣>」

「この一撃に賭けるか」

「俺もだ」

「死ね！」

「お前がな！」

俺の剣と相手の槍が重なりあった。

……………。

「あらあら、何か戦ってる音がしたと思えば副会長さんじゃないですか？ しかも傷だらけ？ 気絶してるのですか？ 保健委員長として手当てしないといけませんね。＜女神の癒し＞」

俺と相手は相打ちになり、俺と相手は倒れた……。

初めての本格的勝負！

大河が侵入者と戦って、私と葉月ちゃんは会長さんたちを探すことになりました。

あ、今回は私（彩崎奈々）視点なのでよろしくお願いします。

まずは1階から探しに行き、全てのクラスを見ましたが誰もいません……

「奈々さん、あの監視カメラが映っていなかったところに行きますか？」

うん、ちょっと怖いな……。今は大河がいないし……。大丈夫かな……？

「一応行こうか、映らなかつたところってどこなの？」

「えーと……月麗学園旧校舎です」

月麗学園の旧校舎は学園からちょっと離れたところにあります。

旧校舎はボロボロで気味が悪く誰も近づかないはず。

「それじゃあ行きましょう」

ただ監視カメラが壊れただけ、という結果を祈りながら。そこで何も無いことを祈りながら。

そして私と葉月ちゃんは旧校舎についた。そこには……

「やー、そこのお姉さん、ボクとお茶しない？ なぐんてね」

「もちろんお断りします」

そう言いながら私は辺りを見回した。けど会長さんらしき人物は誰もいなくて、戦ってる気配もなかった。

「ん？ 君が探しているのは弱気な王子様？ 元気なお嬢様？ それとも最強の女王？」

晴樹先輩、由香里先輩、会長さんのこと？

「どこにいるのか知りたい？」

「簡単には教えてくれなさそうな顔ですね」

「もちろん。簡単には教えないさ」

「で、どうしたら教えてくれるんですか？」

「ボクと戦って君が勝ったら教えてあげる。簡単なルールでしょう？」
「戦いはいいけど葉月ちゃんはどうしよう。」

「そちらのお嬢さんも参加してもいいですよ」

2対1……でも葉月ちゃん的能力は戦闘向きじゃないし……。

「奈々さん、私も戦いますよ」

「うん……」

「さーて、ゲーム開始じゃん」

「<放電>！」

私は相手が話し終わると同時に雷を放った。

「まあ、気が早いお嬢様なこと」

「！」

「何で？ って顔してるね。ゲームは始まったばかりだ、もっと楽しもうよ」

私の雷が聞いてない？ 何で？

「<放電>！」

「また同じ攻撃かい？ はあ……もう飽きたよその攻撃、<草のバリア>」

草？ ってことは自然を操るの？

「次はボクから攻撃するね、<紅薔薇>」

そして相手のほうから私に向かって薔薇が飛んできた。
でも遅い。

私は真横に避けた。

「まだまだ」

相手は笑いながら言った。

すると薔薇のとげが全方向に向かって飛んできた。

「<電気ノ壁>！」

「反応が早いね、でも後ろがから空きだ、<蔓の鞭>」

「いつ……」

私はとげのほうに集中していて反応ができなかった……

「だ、大丈夫ですか!？」

「……大丈夫だから、葉月ちゃんは逃げて」

「え、で、でも!」

「いいから!」

「は、はい……」

葉月ちゃんは全速力で逃げた。

「あらあら? もう一人のお嬢さんは仲間を置いて逃げちゃったの?」

「……………」

「臆病者? ひ弱? 雑魚? なのそのお嬢さんは」

「……葉月ちゃんの悪口を言わないで」

「でも事実だ」

葉月ちゃんは生徒会に入ったばかりの新入りで話したことが少ない。けど私たちの仲間。だから仲間の悪口を聞くのは嫌だ。絶対に負けたくない!

「許さない……<放電>!」

「まだ懲りないの? いい加減諦めな、<草のバリア>!」

「じゃあ次はもう一段階上の<落雷>!」

「へー雷を落とせるのか。でも<草のバリア>!」

「残念ながらその落雷は貴方に落とされたものじゃないよ」

落雷は私に落としたものだ。そして私の体に雷を纏わせる。

「自分に?」

「<放電>!」

「だから! 飽きたって言うてるだろ! <草のバリア>!」

「私もそのバリア飽きました」

私が放った雷は草のバリアに当たりバリアを焼いた。そして相手に当たった。

「くっ……そんなの猫のラッキーパンチだろ? <紅薔薇>!」

「<電気のバリア>」
「ほくら、また後ろがから空きだ！ <蔓の鞭>！」
「その攻撃も飽きましたよ、<電気空間>」
私の周りに半径2メートルの円状の雷をつくった。
「とどめ！ <放電>！」
「あははははっ！ 残念ながらそれは効かないよ！ <草のバリ
ア>！」
「だからそれは効きませんって……!!」
しまった！
「どうやらその落雷の力を使い果たしたみたいだね、<蔓の鞭>」
「<電気の壁>！」
「ボクもそろそろ本気だしていい？」
「!!」
「つてことはまだ本気じゃなかったの!？」
「<光合成>」
そういつと相手の傷が綺麗に直っていった。
「光合成って植物が二酸化炭素を吸って酸素をだす、けどボクは二
酸化炭素を吸って回復するんだ」
振り出しに戻った……。
「さあ！ 絶望すればいい！ ボクの力の前でひれ伏せばいい！」
どうすればいいの……。
また攻撃し続ければいいの？
でもまた光合成したら？
分からない……。
「さーて、次の攻撃で楽になりなよ<蔓の槍>」
終わった……。
「<機械操作>！」
「何だこの機械？」
「ハアハア……遅れました……白井葉月、参上ですっ！」
「ああ、臆病者のお嬢さんか」

「どうしてここに来たの？」

「だって仲間を置いて逃げるなんてできないです。だからこれを持ってきたんです」

それは色々な機械だった。

「選手交代です。私が相手になります！」

「二人でかかってきてもいいんだよ？」

「それじゃあ私も再参加する」

「で、でも」

「いいから」

「はい……」

「二人だけで話してるなよ！ <蔓の槍>！」

「<機械操作>！」

葉月ちゃんはクレーン車を操作して蔓を折った。そして相手を攻撃した。

「ちっ！ <紅薔薇>」

相手は薔薇をクレーン車に飛ばした。

「散れ！」

すると薔薇の花びらが散り花びらがクレーン車を切り刻んだ。

「俺の薔薇の切れ味はどうだ？ 強いだろ？」

そして葉月ちゃんは笑った。

「それじゃあ爆発してください」

「は？」

クレーン車が爆発した。近くにいた相手はその爆発に巻き込まれた。

「植物で爆発は防御できませんよね？」

「確かに効いたぜ。でも残念だね。無傷だ」

「また光合成……」

「回復できるんですか？」

「お前らの攻撃は全て無意味だ」

どうしよう……必殺技みたいな奥の手はあるけど、葉月ちゃんが

危ないし……。

「ならこれなんてどうですか？」

銃？ しかも大きい。

「ロツクオン！ 当たって！」

「そんな銃ごときでボクに勝てると思ってるの？ <草のバリア>

「しかたないです<融合>」

葉月ちゃんはもう一個機械を取りだした。

「よし、これでいいです。奈々さんちよつといいですか？」

葉月ちゃんが私の耳元に来た。

「……………分かったよ。<放電>！」

私は葉月ちゃんの改造した銃に電気を飛ばした。

「充電完了です！ 発射！」

葉月ちゃんは私の電気を纏わせた弾を発射した。

「だから効かないって、<草のバリア>」

「残念ながら私がこの銃に融合させたのは奈々さんの電気を倍増させる機械です。そしてこの攻撃は囷です。本命はこれからです」

「はあ？」

葉月ちゃんには悪いけど、奥の手だすね。

「<神雷龍>！」

神の雷の龍。まだ制御だ完璧じゃないし、私の全ての電気を食われる。だから奥の手。これで倒せなかつたらお終い……。

「あつははははは！ 面白いや！ やっぱりゲームはスリルがないとね！ <鳶の壁><草のバリア>！」

私の龍は相手のバリアに当たり、それを貫いた。相手は気絶して倒れた。

ヤバイ……私も全力を出したから……

「奈々さん！ 大丈夫ですか？ 今助けを呼びますから！」

臉が重い……疲れたし寝てもいいよね。

「あ、もしもし。生徒会役員の白井ですが保健委員長さんはいますか！ 緊急で旧校舎にきてください！」

限界対決

「失礼します」

「ああ、晴樹くんですか」

「ちくつす、私もいるよ」

「お二人ともお早いですね」

「つてことはまだ二人来てないの？」

「はい」

「ん？ 何これ？」

私は机にある手紙に気がついた。

内容は

はじめまして生徒会のみなさん

私はある悩みがあります

なので生徒会のみなさんに相談したいのですが
いいでしょうか？

4時に旧校舎で待ってます

「何だつたんですか？」

「いや、生徒会に相談だと、どうする？」

「もちろん相談は受けますよ」

「りよ、かい、4時から旧校舎だつてさ」

「そ、それって僕も行くの？」

「もちろん、だつて生徒会のみなさまって書いてあるから」

この時ちよつと怪しいと思っていた。

この手紙は不自然だった。

何で私の机に置いてあったのだろう？

無断で生徒会室に入ったのか？

そういう手紙なら生徒会専用のポストに入れればいいのに。

そして何で旧校舎なのか……

色々な疑問が頭を過ぎったけど、まあ、いつか。

「つてもう4時じゃん!」

後輩くんたちが来ないから私たち3人で旧校舎に行った。

旧校舎に着いた。

そこにいるのは陽麗学園の制服を着た生徒が3人いた。っていうか陽麗の生徒じゃん。

「つてことは私たちは釣られたのかな？」

「で、君たちは月麗生徒会に何か用かな？」

「ふん、僕たちは生徒会長に君たち生徒会と遊んで来いと命令されて来たんだが。君たちは生徒会みたいだな」

3人うちの1人のメガネが返事をした。

「へー遊びに来たね……。上等じゃん。」

「そつだよ私たちが生徒会だよ」

「そつか……。じゃあ遊ぼうか」

「上等だよ」

「ね、ねえ、話を勝手に進めないでよ」

「いいの、私に任せて」

「君は自信满满だね。つてことが君が生徒会長かな？」

「私? そんなわけないでしょ。この人が生徒会長」

さつきから油断が出来ない。ずっと私たちがここに来てからずっとメガネは殺気を放ってる。

「とりあえず、ゲーム開始だ」

「それじゃあメガネ! お前は私の相手だ!」

「ふん、僕は生徒会長と遊ぶつもりだったけど、べつにいいや……」

「じゃあ俺たちがこの美少女生徒会長と遊ぶね」

「お手柔らかに」

「……………じゃあ私がこの男の子と」

「え!? 僕?」

「由香里さん、とりあえず場所を変えましょう。 <空間移動>」

「どうやら私たち3人は別々の場所に移されたみたい。」

「さあ、これで邪魔者もいなくなつたし。遊ぼうか」

「うん、でも残念だね。もうゲームオーバーだよ。〈爆発〉！」

「君がね」

「！」

「何が起こつたの？」

「僕は陽麗学園生徒会、役職は会計。一応僕は実力者つてわけだ。だからそのな爆発で倒れるわけないだろ」

「へー、同じ役職同士仲良くしよう……つて言うわけないでしょ！」

<業火弾〉！」

「残念……僕は仲良くなれると思つたんだけど……」

「だから何で！ 何で私の攻撃が効かないの！」

「それじゃあ僕の攻撃しますね。〈ブロックゴーレム〉」

相手の手からブロックが出てきた。そしてそのブロックは大きいゴーレムになつた。

「踏み倒せ！」

「あぶね！ >炎剣<！」

「まただ。また私の炎が消えた。」

「>火炎放射<！」

炎を放射してその攻撃を避けた。

「メガネの能力つて何だ？ ブロックを操る能力か？」

「そんなに僕の能力が気になるの？」

「まあな、だつて私の攻撃効かないし。ムカつくし」

「じゃあ種明かしだ。僕の能力は相手の能力をブロックにして、そのブロックを操ることができる。だからこの能力で君の炎をブロックにしてそのブロックをゴーレムにしたんだ。そしてもう一つ情報をあげるよ。そのブロックにした能力をブロックが扱うことが出来るんだ」

「つてことは私の炎が使えるつてこと？ 面倒くさい能力だな……。」

「まあ、諦めて。死んでください」

「私は直ぐには諦めない！ >業火弾<！」
まずは様子見。

「だから僕の前では能力は無意味だ！」

でも、顔は正直だね。たぶん私の勘だけど、一度に吸い取る量は限られてる、だから多くの能力を吸い取るのは無理だ。

「気づきましたか？」

「まあね、アンタの限界が先か、私の限界が先か」

「>ブロック業火弾<！」

業火弾のブロックバージョン？

「ん？ 何ニヤニヤしてるのです？」

「いゝや」

それがブロックだとしても、それが炎なら私は操れる！

「とりあえず消える！」

「そうですね、たとえこれがブロックであったとしても炎なら操れるんですか。じゃあ次は普通のブロックで戦いましょうか」

「>業火弾<！」

「50%……」

その後ずつと業火弾を出してそれを吸い取った後、60%……70%……って言ってたけど100%になったらどうなるの？

「>業火弾<！」

「100%！ >ブロック要塞<！」

するとメガネの足元からブロックの要塞が出てきた。

「これで僕の要塞は完成した。これで君の勝機はなくなった」

「へー、そうなのか。じゃあ試しに>業火地獄火<」

業火地獄火はかなりの高い温度の炎を辺り一帯に放つ地獄の炎。

「新しい技ですね……でも残念ですね」

やっぱりダメか……。もっと強い炎を……。

「あら？ もう終わりですか？ じゃあ僕の番だ、大砲用意！ 発射だ！」

ブロックの大砲!? > 火炎放射<

「ふ〜ん、やっぱり避けるのか……じゃあ囲め!」
するとブロックの要塞は私を囲んだ。

「一斉射撃だ、>ブロック大砲<!!」

囲まれたしどうしようか……。横に避けられないし……。終わり?
なわけないでしょ。

「> 火炎放射<!!」

横がダメなら上!

「やはり上ですね、> 追尾<!!」

何て有能なブロックなこと。やっぱり限界勝負かな……。ここで
本気を出すことになるなんて思わなかったよ……。

「……> 紅蓮朱雀<!!」

「へーここで勝負かな? じゃあ君の攻撃は全て僕が吸収してあげ
るよ!」

私の必殺技、紅蓮不死鳥は紅蓮の炎の不死鳥を相手に飛ばす技だ
けど今は違う。

「……不死鳥状態変化」

私の手に纏わせて相手に突っ込む!

「これだけで終わると思わないでね! > 火炎ミサイル<!!」

「やっぱり強い人と戦うのっていいですね!」

「まだまだ! > 業火炎斬<!!」

全ての炎を出し尽くす!

「> 火炎ミサイル・業火弾・火炎放射<!!」

私の炎を出し尽くすまで私は攻撃を止めない!

「> 地獄火<!!」

限界なんてもう過ぎてるけど、負けられない!

「ハアハア……最終奥義……> 地獄火不死鳥<!!」

私の炎をこの技に!

「最終奥義ですか! 吸いがありますね! 僕もそろそろ限界
です。これで勝負が決まりますね!」

メガネが私の炎を吸収し始めた。でも私は目を開けていることも辛く、その場で寝てしまった……。

「残念でしたね！ 僕の勝利です！ それにさっきのアレは嘘です。僕の限界はまだですよ！ さあ、このゲームし終止符を！」

「終止符をうつには早すぎるでしょう」

「！？」

「私が通りかかってみれば……ねえ、君覚悟は出来ているの？」

「……貴方は？」

「私？ この子と同じ月麗学園の生徒。そして剣道部部長の霧木妖花」

「何？ 君は僕と戦うの？」

「うーん……私はこの子を助けたいだけなんだけど、それを君が邪魔するなら私は貴方と戦う」

「へー、面白いですね！ >ブロック大砲く！」

「ブロック？」

「さあ、死になさい！」

「まあまあ、落ち着いて。私がそんなブロックで死ぬわけないですよ」

「！？ お前何をした？」

「何って居合い切りかな」

「ただの刀で僕のブロックが切れるわけがない！ そしてお前の能力を吸い取ったはずだ！」

「何言ってるの？ 私は能力なんて使ってないけど？」

「じゃあ何故！」

「私の能力はこの眼よ。相手の行動を読む眼。そして私には昔から異常だったの」

「異常？」

「そう、私は妖刀が使えるこなせるの。普通の人なら制御不能ですぐ死ぬわよ」

「その妖刀で僕のブロックを切ったのか？」
「そう、理解が早くて助かるわ。それで貴方は私の邪魔をするの？」
「もちろん、ゲームは終わってないからね」
「ふうん、でも今の君は立ってるだけで辛そうだけど？」
「そうか？ 僕はまだまだ戦える……何だこんな大事なときに。もしもし」
「もしもし？ メガネくん？ もう時間オーバーだから帰ってきてね。以上。バイバイ」
「っあ！ ったく、あの人は……退却命令がでたので帰らせてもらいます。またの機会に」
「ええ、またどこかで」

弱気な僕の本気の戦い（前書き）

お久しぶりです。

まあ、まず一言……バトルの解説無理だよっ！

難しい……初心者には無理だよ……。

あ、それと、ブログつくりました！

よかったら見てください、たぶんトップの画面で行けると思います

弱気な僕の本気の戦い

今回は僕視点です。ご、ゴメンなさい……僕なんかで……。

生徒会長さんに飛ばされた僕と相手の女の人……ご、怖いよ……。
嫌だよ戦いたくないよ……。

「………？ 戦いたくないの？」

「う、うん」

「………そう、でも命令は絶対。私は貴方を倒す」

「うう………」

誰か来ないかな……助けてくれないかな……。

そう思ってたけど誰もこない……。

やっぱり僕が戦わなくちゃいけないんだ……。

「………来ないなら私から攻撃する」

そう女の人が出てポケットから携帯を出した。

「<送信>」

？

すると何処からか僕のお腹を殴られた。だけど女の方は動いてない。
い。

「<送信>」

また。

次は頭……。さつきからやられてるし、次はこっちから。氷柱で
上に上げる

「<受信>………氷柱での攻撃」

よ、読まれてる!？

「ひよ、<氷柱>！」

「………読まれてもするんだね。<送信>」

僕の氷柱が壊れた!？

「<送信>」

また殴られた……痛い……。

「<アイスボックス>！」

相手を氷の箱に閉じ込めた。

「<送信>」

壊された！ うう……何で？

「<冷凍ビーム>！」

「<切り取り>」

え！？ 僕的能力が消えた！？

「<貼り付け><送信>」

！？ 何で僕の攻撃が！？

なぜか僕の攻撃を相手が使ってる……やっぱり強いよう……。

「……ここでネタ明かし、私の能力はこの携帯を使って相手を攻撃するの」

「？」

「……“殴る”と打つて<送信>するとかなんか感じに」

ま、またお腹を殴られた……。

「……受信は相手の心を読み。切り取りは相手の能力を吸収して送信できるの」

だから僕の冷凍ビームが効かなかったのか……。

「……もうお終い？ じゃあ止め刺してあげる。<送信>」

「グハッ……！」

血もでてきたし……もう嫌だ……もう戦いたくない……。

「……これで最後、<送信>」

「うっ！」

首を絞められてる……く、苦しい……。

もう終わりかな……。

負けてもしようがないよ、だって攻撃しても切り取られるんだもん……。

……でも。

「<氷柱>」

「……………だから攻撃しても無駄、<送信>」
「また壊された……………じゃあ次は……………」
「<氷塊>」
「<送信>……………硬いつ」
「残念だね、氷塊は殴るだけでは壊れない。」
「<送信>」
「こ、壊れた!? 何で? 何て打ったの?」
「<送信>」
「い、痛い。何回もお腹や顔を殴られた……………」
「ハアハア……………」
「……………そろそろ本気を出したら?」
「本気……………。でもこの人が相手ならいいかな?」
「……………<氷の会場>」
「ここはもう僕の会場。僕に支配権がある……………相手の好きにはできない僕だけの会場。」
「攻撃はここから! <氷柱>」
「……………しつこいね、<送信>」
「それだけでは壊れない。」
「……………さつきよりは硬くなったね」
「<氷柱>」
「壊れないのが分かって相手は氷柱を壊さないで避けた。」
「<氷柱>……………<氷柱爆発>!!」
「!!」
「氷柱が爆発して氷が全方向に飛び散った。」
「……………負けそうだから本気だしていい? <データダウンロード>」
「<ダウンロード?」
「……………ダウンロード終了、<貼り付け><送信>」
「! 何これ? 僕の氷じゃない。」
「<氷塊>!!」

どうにか相打ちにできた。

「……………これはこの前戦った相手の攻撃をコピーした物。次これ
<貼り付け><送信>」

「<氷塊>!!」

「……………これはさっきの攻撃に違う攻撃を加えた物」

「<氷塊>!!」

「……………そのので防げるわけないでしょ」

僕の氷塊は簡単に砕けた。

「<氷壁>!!」

これで何とか防げた……………。

これは僕の勘だけどこれ以上の技があるかもしれない。

「……………<貼り付け><送信>」

これは炎……………。

弱い氷じゃ、すぐに溶けてしまう……………。

だから賭けに出ようと思う……………。

「<氷壁>!!」

「……………ムダ」

氷の壁はすぐに溶けた。

でもこれは準備のための壁。

「<氷槍>」

僕の奥の手ではないけど、僕の必殺技。

氷の槍。

槍からは冷気が出て触れたものは全て凍ってしまう。

絶対零度の槍。

それで僕は相手に突っ込む!

「……………<送信>」

相手は炎を撃ってきた。

でも。

「僕の槍はそんな炎じゃ溶けないよ」

何で最初に槍でやらなかったは、接近戦が苦手だから……………。

そして相手の能力が分からなかったから。

「…………… <貼り付け> <送信>」

さっきとは比べ物にならないほど大きい炎。

「でも……………」

ここはもう僕の会場。

「氷槍の強さを教えてあげる」

触れたものを凍らす。

さっきから触れてる。

大気に。

「 <大気氷結>」

さっきの炎で僕の氷の会場は溶けた。

蒸発した……………。

しかも相手の周りを中心に。

今、相手を凍らせれば僕が勝つ。

だけど僕は悪人じゃない……………。

殺しちゃったら警察に捕まっちゃうよ……………。

だから凍らせる部分は手と足。

壊すのは携帯。

「…………… っっっ」

氷槍で携帯を壊す。

これで僕の勝ちかな？

後はどうしよう……………。

その前にここってどこかな……………。

うう…………… 困ったな……………。

あ、そうそう僕の携帯で……………。

って充電切れてる！？

「……………」

どうしよう……………。

「あのう…………… ここがどこだか分かりますか……………？」

「…………… 分からない」

「ですよね……」

ハア……会長……助けてください……勝負より、今の状況のほう
がキツイです……。

私は創る・彼は壊す、幸せの空間を（前書き）

おけましておめでとございます！

今年も紅の雲雀をよろしくおねがいます！

今年最初に投稿するのは「月麗学園の大河くん」です
それでは、どうぞ！

私は創る・彼は壊す、幸せの空間を

私は二人を誰もいない場所へ移した。

「ひゅ〜、さっすが月麗学園の生徒会長。凄いつすね〜」

「……………」

私は怒ってます。

私以外の人を巻き込んだことを。

いくら生徒会とはいえ、あの子たちを巻き込むのはイヤです。

「じゃあ、これからゲーム開始つす。さあ、殺りあおうつす。〈加

速〉!」

「……………私は今怒ってます。だからちよつと黙ってください……………」

「ひゅ〜、怖いつすね〜。警告つすか〜?」

「警告を聞かない悪い子には罰をあげなくていけませんね」

「こつわ、俺つちは絶対に負けるわけにはいかないつすよ。〈最加

速〉!」

「……………〈空間結界〉」

「え! い、痛いつす……………。見えないのにここに何かあるつす……………」

これが会長から聞いてた能力つすか」

「……………黙ってください」

「やっぱり怖いつすね」

威嚇程度に結界を小さくした。

「そろそろ危ないつすね〜。俺つちは一応生徒会役員なんでここで

負けるわけにはいかないつす! 〈老化〉!」

私の結界が壊れましたか……………」

ちよつと油断してしまいましたね……………」

「俺つちの能力は“速さ”の操作。今は結界の速さを操作して、老

化させて壊したつす。能力で作った物も例外じゃないつす。だから

お前の攻撃は無意味つす! 〈神速〉!」

「……………〈空間結界〉」

「だから無意味と……」

「無意味なんですか？」

ニコリと笑みを顔に浮かべて話す。

「あ、……あくま」

黒くて黒い。

歪みに歪んでいるその空間。

それを操作する悪魔。

その笑みは全てを狂わせる、狂った悪魔の笑み。

「ちよつと黙ってくださいね」

悪魔は無表情になり“ゴミ”を排除した。

「私を怒らせたことを後悔してくださいね……」

そう言っただけ立ち去ろうとする声か聞こえた。

それは私の怒りを増幅させる。

陽麗の生徒をこつちにさしむけた本人。

「不知火矛盾さん……」

「そーだよー、ひっさしぶり！ 元気にしてた〜？」

「もちろんです。だから貴方は壊したんですよ？ 幸せの空間を」

「そー！ 唯一僕が壊せる空間！ それ以外の空間は壊せないから

ね〜」

「ほんと……貴方って言う人は……今から月麗学園生徒会長として

貴方を倒します！」

「ふ〜ん、でも残念。これはあくまで“ゲーム”。プレイヤーは参

加させたけど。開催者である僕は参加してないから」

「！ ってことはこれはホログラムですか」

「そーいうことだね。叩いてみれば？ 触れないから」

そういつて陽麗学園の会長、不知火矛盾は挑発してきた。

私が生徒会長になったときから知ってる人物。

私が一番嫌いな人物。

何を考えてるのか分からない人物。

この天麗市で一番危険な人物……。

「まあ、落ち着いて。君の生徒が負けても殺そう、なぐんて考えてない。だってゲームだもん。でも重症は負ったかもね？」

「今ハッキリ言っておきます」

「ん？」

私はそのホログラムに向かって言う。

「今度調子にのった行動をとったら私が許しません」

不知火さんは顔から一瞬笑みが消え、一瞬で悪い笑みが顔に浮かんだ。

「ふくん、楽しみにしておくよ」

じゃあ、と言って不知火さんのホログラムは消えた。

私は許せない。

あの子たちを巻き込むのが。

あの子たちを傷つけるのが。

だから私一人を狙ってほしい。

だって誰にも被害がでないから。

私だけを狙ってほしい。

誰も傷ついてほしくないから……。

私は創る・彼は壊す、幸せの空間を（後書き）

にはは

久しぶりに！

ヤンキーの妹を書いてるよ！

いや〜

最初から書き直すか迷ってるんだけど

どっちがいいのかな？

まあ、今制作中です！

では！

不器用な守り方（前書き）

すみませんです！ 凄く時間がかかりましたね。いやー、一応書いておいたんですけど投稿するの忘れてました……。本当にすみません。

では遅くなりましたが短めの22話です。どうぞ

不器用な守り方

いつのまにか来た嵐はいつのまにか過ぎ、いつもと変わらない朝。変わってるのは役員みんなが怪我をしていること。

雛森先輩は学校に来なかった。

俺は保健委員長さんに助けられた。

だから一応大怪我にはならなかった。

奈々も怪我をしてたけど頑張ってきたらしい。

白井さんもちよつと怪我をした。

晴樹先輩も疲れてる様子だった。

たぶん、俺だけじゃなくてみんなも戦ったんだと思う。

午前の授業も午後の授業も頭に入らず、ずっとみんなのことを考えてた。

奈々と白井さんは笑顔で大丈夫って答えてたけど。

俺は心配だ……。

会長も……。

会長は無傷だったけど、何か暗い顔をしてた。

放課後になり、俺は鞆を持ちいつものように生徒会室に行く。

俺は廊下を歩く。

色々考えながら。

会長に何を聞くか。

俺たちが来る前になにがあったのか。

でも一つだけ分かることは陽麗が関わってること。

ってことは陽麗の生徒会長が主犯。

そんなことを考えてると生徒会室の前にいた。

早速ノックして入ろうとする。

だけど俺の足は言うことを聞かない。

何かに怯えるようにガクガクと震えてる。
怖い。

まるで誰も寄せ付けられないように生徒会室はそこに存在している。
俺が入ることを拒むように。

中々足が言うことを聞かない。

手も震えて扉を開けようとしなない。

廊下には帰宅したり部活に行く生徒がいるけど、俺にはその存在
が感じられない。

まるでそこに俺しかいないみたいに。

でも……。

俺は負けられない。

確かめたいことがあるから。

恐怖になんて負けてられない。

会長に話を聞くまでは。

勢いよく扉を開ける。

そこには会長がただ一人座ってる。

驚きも反応もしない。

「……失礼します」

と、言い俺は自分の席に着く。

会長は雑務をしないで考え事をしているようだ。

俺はあの時の恐怖を思い出してる。

あれは何だったんだ……。

そんなことを考えてると3人が入ってきた。

その顔はまるでさっきまでの俺。

俺が感じてた恐怖は間違いじゃなかったらしい。

その後会話がなく無言が10分続いた。

そして最初に話した人は……。

「今日で生徒会は解散です」

「……！！！！！！！！」

予想してなかった言葉。

それを話したのは生徒会長。

「な、何ですか!？」

「そうですね! 会長さん!」

「ぼ、僕もそう思います!」

「どうしてですか……?」

みんな動揺してた。

「私にとって貴方たちは大切な人たちです。だから傷つけたくありません」

昨日のことだろうか……。

「いつ、襲われるか分かりません。だから生徒会は解散です」

雛森先輩がいたら。

『葵! 何言ってるの! 私たちは仲間でしょ!』

こんな感じの言葉を言うかもしれない。

だかど俺には言えない。

言う勇氣がない。

言う権利がない。

口に出ることが出来ない……。

「生徒会は私だけでするので。みなさんは帰ってください」

誰も何も言えなかった。

言うことができなかった。

4人ともずっと無言だった。

シヨックと。

何も言えなかったことを後悔している。

次の日。

起きるのがだるかった。

とにかく何も考えたくなかった。

考えれば考えるだけ分からなくなるから。

俺は放課後の校舎をつろつろしてる。
すると……。

「おっす」

「あ、福村先輩」

「生徒会室に行かなくていいのか？」

「あ、はい……実は……」

何があったのか福村先輩に話した。

陽麗学園の生徒に襲われたこと。

俺たちが生徒会役員をクビになったこと。

「ふ〜ん、そうか……ようは会長はお前等のことを大切に思ってる
んだろうな。だからクビっていう方法でお前たちを守ろうとしてる
んだ。ほんと不器用な会長だな」

「俺たちが弱いから……」

「ん……」

先輩は俺の顔を見ながら言った。

「だったら強くなって会長を安心させてやれ。俺たちは会長が心配
するほど弱くないって。なんだったら俺が相手してやるっか？」

「いいんですか？」

「俺は暇だからな！　じゃあ明日の放課後から」

「ありがとうございます！」

頼れる変態（前書き）

どうも紅の雲雀です。今日は卒業式だけだったんで午後は暇なのですよ。だから投稿します。では、どうぞです

頼れる変態

私はあの後、保健委員長さんに助けられた。
その時。

『今日は患者が多いわね』
と言っていた。

もしかしたらその患者の一人は大河だったのかもしれない。

私は悔しい。

生徒会をクビになったこと。

私が弱いこと。

もっと強かったら会長さんも心配しないはず。

修行……したほうがいいのか？

でもどうやって修行しよう……。

「奈々さん、大丈夫ですか？」

「え？ あ、うん……。」

「何か顔色悪いから……。」

「大丈夫……。」

葉月ちゃんが心配そうに私を見る。

「考えることは一緒ですか……？」

「たぶんね」

「解散……。」

不安が心を支配する。

私が弱いから……。

そればかりが私の心の中で永遠とループする。

「奈々さん」

「何？」

「修行しましょう」

「え！？ いきなりどうしたの」

「弱いままだとダメな気がして……弱いと会長に心配をかけるから……だから強くなって会長を安心させてあげましょう」

「でも……私たち、もう生徒会役員じゃないんだよ……？」

「でもじゃないです！ やると言ったらやるのです」

「どうやって修行するの？」

「ん〜っと……じゃあ、私はロボットを作るのでそれと戦ってください」

「うん……」

「そうと決まれば……じゃじゃん！ 完成です！」

「もうできたの！？」

「はい！ 私が作るのが速いか、奈々さんが壊すのが速いか……」

「勝負だね」

「<雷の槍>！」

私は葉月ちゃんの作ったロボットを壊してる。

私と同じくらいの速さで葉月ちゃんはロボットを作ってる。

「砲台用意です！ 続いて大砲を配置！ <大砲の絶壁>です」

大砲のバリアね……。

残念だけど……。

「その弾の行き先は私じゃなくてそっちね」

「！」

磁石。

私の電気で作った凄く強い磁石。

大砲の弾は私のほうじゃなくて、そっちの磁石にほうにとんできた。

「まだまだです！」

これはトラック？

分からないけどデカイ車が突っ込んでくる。

「<落雷>！」

車のと真ん中に雷を落とした。

そして車は爆発。

煙で辺りが見えない。

これを利用して私が勝つ。

「甘いですよ！」

いつのまにか葉月ちゃんが後ろに立っていて、周りにはロボットがあつた。

「参りました……でも何でここが見えたの？」

「そんなの簡単ですよ。私は煙を見えなくする機械を作ったんです。そして足音を消すために、音のしないロボットのキャタピラに乗って、奈々さんの後ろに回ったんです」

「そうなの……惨敗ね……」

「いやいや……奈々さんが本気をだしてたら私黒コゲですよ」

「でも負けたのは私だし……やっぱり修行……でも誰に見てもらおう」

「うん……心あたりがありませんね」

「私も……」

私は一人思いついた。

でもこの人だけは……。

私は迷っていた。

一人。

いるけど頼むのは気が引ける……。

「いるよ……一人だけ頼める人が」

「誰ですか？」

「宮尾土門先輩……」

「宮尾先輩ですか……？」

「うん……変態で……変態で……変態の最低な先輩……あの人に頼むのは気が引けるけど。かなり強いし、前年度の生徒会役員だった

人

「え？　じゃあ何で今年は生徒会に入らなかったんですか？」

「会長さんいわく『あの変態さんは私の生徒会にはいらなさいですか』だってさ」

「……そういうことですか……」

「「ここらへんでいいかな」

」？」

「ここはプールの近く。

私はそこに座る。」

「葉月ちゃんは危ないから。遠くに行つて。そして……（「じよ
「じよ）」

「あ、はい」

遠くに行つたことを確認する。

そして……。

「＜放電＞！」

「うぎゃー……！！……！！……！！」

やっぱり。

「こんにちは、先輩」

「あ、奈々ちゃんだね。久しぶり。俺と付き合つ気になった？」

「そんなわけではないでしょう……」

「え。え？　ど、どこからきたんですか??」

「お、白井葉月ちゃんか」

「何で私の名前を？」

「ふん、俺はこの学園の女子はほとんど覚えてるんだぜい」

「だから先輩はみんなから変態って呼ばれてるの」

「さつきから葉月ちゃんが不思議そうにしてる。」

「で、どうやってここに来たんですか??」

「俺の能力だよ」

「先輩の能力は“土”ですよね？」

「うん、俺は土を操る能力」

「さつきは土に潜っていたんでしょ。だから私が地面に向かって放電したの」

「そういうことですか」

葉月ちゃんが手をポンツと叩いて言った。

「で、何の用？ 俺も暇じゃないんだよ？」

「どうせ今からプールを覗こうとしてたんでしょ……」

「そう、そのとおりだ」

「私たちはお願いしに来たんです」

「お願い？」

「私たちの修行の相手になってください」

先輩は笑顔で答えた。

「ごめんね」

「何ですか？」

「だって俺。痛いのか修行とか苦手だし」

「先輩は元生徒会の人間でしょう」

「だから？」

先輩は妙に真剣な顔で答えた。

「たしかに俺は元生徒会役員だった。だから？ 俺にその修行は関係ないし。今生徒会で起こってる問題も関係ない。そんな関係のない俺に何で修行を見てもらうんだ？」

「関係あります！ たしかに先輩は生徒会を辞めさせられました。

会長さんはあんな事言っただけ追いついてみたくらいですけど、会長さんが貴方を追い出した本当の理由を貴方は知らないでしょう」

「本当の理由？」

「一応調べさせてもらいました。3年1組。名前宮尾土門。去年は生徒会に所属していた。そして貴方は大変優秀な生徒だった。授業も生徒会もいつも休まず出席していた優等生。でも去年の夏、一つ事件が起こった」

「そんなことまで調べたんだ……」

「はい」

「????」

後ろでは葉月ちゃんが頭にはてなを浮かべてる。

「だからって修行を見るのと話が違う」

「断ると?」

「ああ」

私はそうですかと言い葉月ちゃんのほうを向いた。

別に諦めたわけじゃない。

話し合いでダメなら、もっときちんとした手段でいかなきゃ。

脅迫とかね。

「では、先輩の持っている画像。全て消させてもらいます」

私が葉月ちゃんに指示したのは、先輩のパソコンにハッキングして画像を消すため。

「もちろん宮尾先輩のことですから、葉月ちゃん的能力はご存知ですよね?」

「きたない手だね……でも、そういうの嫌いじゃないよ。それほど問題は危険なようだし。俺でよかったら手伝わせてもらうよ」

全ては計画通りかな?

でも一応私たちが生徒会が写ってる写真は消させてもらったけど。

それに気づくのは先輩は家に帰ってからのお話。

自分の戦いかた(前書き)

どーも紅の雲雀です

みなさん地震大丈夫ですか？

僕のところは治まってきてますが

まだ油断は出来ませんね

まあ、それは置いて

24話です

どうぞ

自分の戦いかた

放課後。

グラウンドにて。

「おお、やる気はあるみたいだな」

「一応強くなりたいっすから」

先輩との修行。

強くなるための修行。

自分のための修行。

みんなを守るための修行。

「じゃあかかってこい」

「じゃあ行きますよ！」

光速制御で先輩に近づく。

「速い……でもな！」

いきなり俺の目の前に先輩の手があった。

そして先輩の拳が俺の顔をおもいつきり殴った。

「どうだ？ 俺の拳の威力は？」

数十メートルぶっ飛ばされた……。

俺は光速制御で先輩に近づいたのにバレた……？

「おい、これで終わりじゃないだろう？ 来い！」

もう一回光速制御で近づく。

が、またぶっ飛ばされた。

「戦い方を変えてみたらどうだ？」

「<光の銃>」

俺は銃で先輩を撃った。

が、先輩は余裕の表情でそれを避け、速い動きで俺に近づいてきて俺を殴ろうとした。

俺はそれをギリギリでよけ銃を乱射した。

「そっいえば俺って能力の説明ってしたっけか？ 一応教えておく

と、俺の能力は“限界突破”。俺はこの体の力を100%以上使いこなせる。お前の攻撃をかわせるのも反射神経を100%以上鋭くしたから。お前をあんなにぶっ飛ばせるのは腕の力を100%以上使ってるから、結構この能力つかえるだろ？」

「便利な能力だな……。」

「お前は自分の能力を知らない。知ろうとしてない。だからお前は弱いんだ」

「んなつ！」

「俺がお前に“戦い”つてのを教えてやんよ」

先輩の目は鋭く、その視線だけで人が殺せそうだ。

先輩は地面をおもいつきり殴った。

「地割れか！」

「この力ヤバイ……。」

俺は光速制御で落ちるのを防ごうとする。

「イタツ！」

いきなり後ろから何かが飛んできた。

また飛んできた。

次はしつかりと何が飛んできたのか見た。

「い、石！？」

それを投げてるのは先輩。

石ってあんなに痛かったか？

まるで銃で撃たれたみたい。

「空中では身動きできないよな！」

先輩はおもいつきり地面を蹴り俺の方に飛んできた。

「トドメってな！」

俺には避ける術がなく、先輩の攻撃で気を失った。

気がつくとそこは保健室だった。

「うっ」

起き上がれない。

痛い……。

そして俺は体を見た。

「スゲー包帯の数だ……。どんだけ俺怪我したんだよ……。」

どれくらいで治るんだろうと考えていたところに女子生徒が来た。

「あら、起きましたか。痛くありませんか？」

「これを大丈夫に見えるなら、速く眼科に行ったほうがいいと思いますよ。高橋先輩」

「最近怪我をすることが多いみたいですね」

前回来たときは陽麗のやつと戦ったときだったと思う。

「この傷ならあともうちよつとで治ると思いますよ」

「相変わらず高橋先輩の能力は凄いですね」

先輩の能力は“治癒”。

しかも能力数値が高い。

だからちよつとした怪我だったらすぐ治る。

「咲穂は心配しすぎだぜ。高校生の男子ならそれくらいへっちゃらだよな」

そう言っつて福村先輩は俺の背中を叩いてきた。

痛い……。痛いつてば……。

「それより大河。修行を続けるのか？」

「はい、もちろんです」

俺はハッキリそう言った。

強くならなきゃいけないから。

「俺そう諦めないやつ好きだぜ。じゃあその傷すぐに治せよ」

「まあ、私が治癒してるんですから、すぐに治りますよ」

「あ、そつだ。修行の途中にも言っただけ。お前は自分の能力を知らなさすぎだ。自分の能力をもつと知れ」

福村先輩はそう言っつて保健室を出た。

自分の能力。

“光制御”。

光を操る能力。

光を生み出し、その光を剣や銃にしたり。

光の速さを操り、自分の速さを光速にしたり。

それ以外にあるのか。

……生み出す。

意識はしてなかったけど、俺は光を生み出してるのか？

だったら光の吸収もできるのか？

試す価値はある。

夜。

俺は学校にいた。

試すために。

前には能力をぶつけるためのでっかい壁があった。

どんな物質なのかは知らないけど、どんなに能力をぶつけても壊れない壁。

俺は深呼吸をする。

「<吸収>」

光は俺を取り巻くようにして吸収された。

「新技<月光>」

電撃と機械と土

ザワザワ。

朝学校に着くとみんなが騒いでた。

私は近くにいる人に何かあるのか聞いてみた。

「昨日ね、あの壁が壊されたの」

あの壁。

私は何の壁をさしているのか、すぐ分かった。

見てみると壁は粉々だった。

それが何を意味するのか。

奇襲。

すぐにそれが頭を過ぎった。

私はすぐに大河のもとへ急いだ。

「ねえ大河！」

「な、なんだよ」

「今日見た！」

「何をだよ……」

「能力を試すための壁が壊されたんだよ。もしかしたら陽麗の生徒かも」

「……………」

大河は黙ってる。

考え事？

今後の対策？

よく分からないけど、大河は難しい顔をしていた。

「なあ……」

「何？」

「実は……」

大河が私の耳元で言った。

「ええええ……」

「しっ！ 黙れ！」
「……本当に大河が（こそこそ）」
「……信じられないことにな（こそこそ）」
「……どんな技を使ったら壊せるんだろっ……。」

放課後。

「じゃあ、宮尾先輩お願いします」
「ハア……なんか修行を受けちゃったけど……何をしたらいいんだろっ」

「一応私たちと戦ってください」
「分かったよ……かかってきて」

「じゃあ、遠慮なく！」
私はすぐに先輩に放電した。

「ふあゝく土壁」
宮尾先輩は欠伸びながら防いだ。
流石元生徒会役員。

葉月ちゃんは戦車みたいなのを操作して先輩を攻撃してる。

「眠い……スク水の女子を見たい……」
「ホント……先輩って変態ですよね！ 変態さんにはこれだよね！」

<電鞭>！
雷の鞭。
私の力加減で雷の出力・リーチを変えられる。
「避けられませんよ」

「俺は避ける気はないよ、動きたくもないし……俺が動くのはそこにエロがあるときだけだ」

先輩はいらない迷言を言っている。
「本格的な変態ですね！」

「ちなみに痛いのも嫌いだから」
私の鞭は先輩の土壁で塞がれた。
でも……。

「かかりましたね」
鞭を長くした。

そして土壁に巻きつき、壊した。
そのまま先輩を攻撃！

「……………」
「反応がない…………？」

「奈々さん！ 上！」

「上？」

「頭上注意だよ」

先輩が落ちてきた。

私は咄嗟に横へ飛んだ。

先輩は地面にぶつかつた。

「うわ…………痛そう…………」

「痛くないよ」

「わぁ！？」

「しゃ、喋りました！？」

今ので死んだはずなのに…………。

血すらでてない。

「どう？ リアルでしょう？ 俺の分身」

どうやらこれは先輩が土で作った分身らしい。

「さあ、俺はどこ？」

「へ？」

「い、いっぱいいます！？」

そこには数十体の分身がいた。

「……………本物はどれ？」

「本物はね…………たぶんここにはいないのでしょうか？ 分身を通して
こつちの状況を見てるのでしょ

う」

私はニコツと笑った。

「葉月ちゃん、手加減しないでね」

「はいっ！ <モードチェンジ>です」

さっきの戦車みたいなのが葉月ちゃんを包んだ。

「私も戦いますよっ！」

全身フル装備の葉月ちゃんの完成。

重そ……。

でも凄く速い。

「じゃあ私も！」

鞭の長さを凄く長くした。

「葉月ちゃん、ちよつと飛んでて！」

「はいですっ！」

私もおもいつきり鞭を振り回す。

そして半分以上の分身を倒した。

「次は私が倒しますよ！」

葉月ちゃんは飛びながら言った。

「私、これでも銃を扱うの得意なんですよ」

葉月ちゃんはスコープを覗きながら言った。

葉月ちゃんの弾の雨でほとんど死んだ。

「すぐに終わらせてあげる」

そして私は鞭で残りの数体を倒した。

「結構簡単だったね」

「そうでしたね」

安心していた。

終わってなかった。

ここはグラウンドだった。

土。

「修行はこれから」

たぶんさつきより多い数の分身。

「またすぐに終わらせるよ！」

「はいですっ！」

私は鞭を振り回す。

全部の分身の上半身と下半身を分断した。

「終わったね」

そう思ってた。

そしたら分断された上半身と下半身はまた一体の分身となった。

一回り小さいが数は倍になった。

「ここでまた分断すると倍になっちゃうのか……」

どうしよう。

考えるより行動かな。

「乱舞！」

私の周りの分身はかなり細かく。

これ以上小さくならないってぐらい切り裂いた。

けど……。

「合体……」

たぶん大きさは10センチくらい。

「縞パン……」

「……！」

怒った。

今の私は誰にも止められない。

たとえ葉月ちゃんだろうと。

「今私のところに来てくれたら怒りませんよ？」

「本当？」

「ええ」

先輩は土の中から出てきた。

「いっぱつ殴らせてください」

「怒ってるじゃないか!？」

「そりゃあそつですよ!」

もちろん怒らないなんて嘘だ。

仕方ない……殴らせてくれないんだったら……。

目が覚めるとそこは保健室だった。

「本当に奈々さん大丈夫なんですか？」

「うん、だって咲穂先輩の治療能力は凄いから」

「褒めても何もでませんよ」

私はそう話しながら考えてた。

あんなに凄い技ができたことが。

この技を自分のものにしたら、私はもっと強くなれると思う。
これから毎日ここに通うことになるのかな？

星麗

数日後。

俺は修行に明け暮れてた。

自分の能力がどんなものなのか考えたり。

新技を試したり。

福村先輩を戦ったり。

でも福村先輩には勝てない……。

もっと頑張らなきゃいけない。

「おっと」

誰かにぶつかった。

「ごめん、ちよつと考え事をしてたから」

少女は尻餅をついてた。

「大丈夫？ ほら」

俺は彼女に手を差し伸べた。

「……………」

彼女は俺の手をボーッと見た後自分で立った。

見てみると彼女は制服……ってこれ星麗学園の制服じゃん。

彼女は白い長い髪を整えて歩きだす。

「何でここに星麗の生徒が……？」

一応星麗は陽麗と違って穏やかな生徒が多いから奇襲なんてない
と思うけど。

「まあ、いつか」

「おお、遅かったな」

「あ、ちよつと人とぶつかって」

「ん？ 考え事でもしてたのか？」

「ええ、まあ」

「能力のことか？ まあ、ゆっくり知ればいい。俺もそうだったから」

「はい」

強くなるには自分の能力のことを知ってから。それが一番いいらしい。

「んで、制御できるようになったのか？」

「いえ……」

「まあ、頑張るしかねえだろ」

「じゃあ、今日も修行よろしくお願いします！」

「おう！」

「ハアハア……今日はこれぐらいでいいだろ？」

「ハア……ハア……分かりました……」

修行を終えて帰る準備をする。

「今日どっか寄って帰らないか？」

「いいですよ。先輩の奢りだったら」

「お前も言うようになったな」

先輩と話しながら飲食店があるところに行つた。

そして校門をくぐるうとした、そしてまたいた。

修行前にぶつかった子だ。

「君どうしたの？ その制服星麗のだよね？ 誰かに用なの？」

「……………（コクコク）」

彼女は黙って頷いた。

「誰？ 探してきてあげる」

「……………が」

うまく聞き取れなかった。

「……………高坂大河」

次はよく聞こえた……………つて俺!?

「俺に何か用?」

彼女は俺を上から下まで見た。

「……………貴方が副会長」

「まあ、そうなのかな……………?」

一応曖昧に答えてみた。

今の俺は生徒会役員ですらない。

「……………貴方にお話があります」

「お、告白か? じゃあ邪魔者の俺は退散するな。じゃあな」

「あ、ちよ、待って下さいよ先輩!」

先輩は俺をからかってさきに行ってしまった。

「お話って何?」

「……………陽麗学園、最近おかしくありませんか?」

ビックリした。

まさか陽麗の話が出てくるとは思ってなかったから。

「そうなの?」

「……………はい。前までは不良が集まる学園でしたが。生徒会長が

あの人になってからおかしくなりました」

「どんなふうにな?」

「……………ムダに他校にケンカを売ったり……………」

確かに俺たちのところとかよくケンカを売られるよな。

「……………なので、同盟を組みませんか?」

「……………へ?」

「……………星麗と月麗で同盟を組みませんか?」

前までの俺ならすぐに答えがだせるだろう。

でも今は生徒会役員じゃない。

「そういう話は生徒会長にしてくれると助かるな」

「……………分かった……………」

彼女はちよっと暗い顔をして答えた。

あ、名前聞くの忘れてた……………。

まあ、
いつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8084/>

月麗学園の大河くん

2011年10月3日03時34分発行